



31
849



始



31-849



陸軍中將 堀内文次郎著

先づ腹を錬れ

東京 東亞堂藏版

大正
8. 2. 1
内交

緒言

湛へては洋々の水となり、聳えては岷々の山となる、日本武魂のよつて來たれるや久しい哉。其培はれ育まれたる素因、或は多々あるべし、而も禪道は蓋しその主たるものか、戦略や軍機や、殺人刀活人劍、みな禪と一致して、はじめて其妙諦を得べきにあらすや。我堀内中将閣下、夙に縦横の戰略に長じ、武人として天下に名を成せるもの、一に禪の眞髓を體得して、よく然らしめしにあらざるなきか。

本書は閣下のをりにふれ、時に臨みて、後進學生のために筆録し講演せられたる所論を乞ひ受け、集めて一冊子となし、題して「先づ腹を鍊れ」

といふ、謂ふに閣下平生の持論は、此の一語に盡せりと云ふも不可なき也、而して其編纂の序列、校正の任は、すべて編者其責を負ふ、讀者累を閣下に及ぼす勿れ。

大正戊午歲晚

編者識

先づ腹を鍊れ||目次

上篇 解打鼓

禪機と軍機と商機

(一)現代と禪の必要……(二)禪學研究上の注意……(三)心膽を寒からしむ……(四)乃木將軍の話……(五)七轉び八起きの商人……(六)禪の極致

時局と國民の覺悟

(一)伊軍大敗の原因……(二)米國の舉國一致……(三)我が國民性の墮落……(四)他山の石以て我が玉を攻くべし

殺人刀活人劍……………二六

- (一) 禪學と日蓮の流行……………(二) 絶對無限の道……………(三) 言語思量を超越す……………(四) 文字以外に合點せよ……………(五) 門を叩くの瓦子……………(六) 生死の中に無生死あり……………(七) 原坦山美人を抱く……………(八) 冷暖自知……………(九) 臨機應變……………(一〇) 老山能壞少壯……………(一一) 病山能壞色力……………(一二) 死山能壞壽命……………(一三) 衰山能壞一切榮華富貴……………(一四) 軍機禪機の活作用

健全なる精神……………二七

- (一) 信仰心の必要……………(二) 信仰の基礎……………(三) 佛陀の光明……………(四) 善行の源泉

武道禪の極致……………一〇三

- (一) 三味の修練……………(二) 剣道の極意……………(三) 人を斬らば須く血を見るべし……………二六

日本魂と禪……………二六

- (一) 日本歴史と武士……………(二) 歴史の正しい見方……………(三) 鎌倉武士の佛教……………(四) 死生に関する觀念……………(五) 藤原資朝の辞世……………(六) 大内義隆の臨終……………(七) 明智光秀の偈……………(八) 怨親に関する觀念……………(九) 七生報國の勝鬪

中篇 鐵崑崙

古武士の禪機……………一三三

- (一) 源實朝の參禪……………(二) 北條時頼と道元……………(三) 北條時宗の心膽……………(四) 楠正成の生死透脫……………(五) 太田道灌のへんなし袋……………(六) 宮本

武藏の参禪……(七)塚原卜傳の無手勝流……(八)藤原藤房と關山……
 (九)蜷川新左衛門と一休……(一〇)柳生但馬守の禪機……(一一)伊達
 安藝の参禪……(一二)上杉謙信の習禪……(一三)武田信玄の氣鋒……
 (一四)山鹿素行の天然禪……(一五)大石良雄の参禪……(一六)前田利
 家の禪……(一七)鈴木正三の通俗禪……(一八)勝海舟の参禪……
 (一九)山岡鐵舟の禪……(二〇)鳥尾得庵の鬼面……(二一)西郷南洲の
 坐禪……(二二)井伊直弼の参禪……(二三)乃木將軍と南天棒……(二
 四)廣瀬中佐の最期……

禪將奇談

……一五〇

(一)水戸義公と心越禪師……(二)物外近藤勇を破る……(三)原坦山と
 某將校……(四)伊藤公の赤面……(五)桐野利秋の獨々逸……(六)塚原
 卜傳の劍道奥儀……(六)峨山和尚軍人を冷遇す……(八)耶馬溪の奇蹟
 (九)雪潭犬山侯を叱す……(一〇)環溪和尚の大酒……(一一)川合清丸
 の参禪……(一二)古梁魚肉を喰ふ……(一三)徳川家康の負戦……(一
 四)杉本九十郎の強膽……(一五)大雅堂の逸話

下篇 止啼錢

殺活自在の妙機

……二九三

(一)大自在を得たる人……(二)千利休と加藤清正……(三)萬法は皆一
 法究盡……(四)二面裂破の境……(五)脚下を照顧せよ……(六)末期の
 一句

戦争禪

……三二六

(一)森羅萬象悉く戦争……(二)良心あるものは勝つ……(三)煩惱の退
 治……(四)夾山和尚の降魔表……(五)超越して格外の玄機を發用せよ
 (六)最後の勝利者……(七)鐵馬に騎つて重城に入る

大丈夫の人……………三三七

(一)白居易と鳥窠禪師の間答……………(二)心の上の地獄極樂……………(三)昔の青年と今の青年……………(四)目的の貫徹(五)自利利他の活動……………(六)平常心是れ道……………(七)その職くの禪

禪と實際的修養……………三三〇

(一)教外別傳の宗旨……………(二)無舌人の解語……………(三)實參實究……………(四)禪とは何ぞや……………(五)解毒圓香の漢……………(六)古人の修行(七)禪の三根

白刃頭上に臨むも驚かず……………三七二

(一)天下の大勇者……………(二)青島戰の實感

現代の青年子女と其指導者……………三七九

(一)喜ぶべき傾向……………(二)現代教育法の缺陷……………(三)殺活自在の機用

佛教と實社會との交渉……………三二六

(一)爲政者と佛教徒の自覺……………(二)下化衆生の本旨に歸れ……………(三)時代思潮に適應せる布教……………(四)授戒會と佛教護國團

禪より見たる水野内相……………三九五

(一)予の後藤大臣觀……………(二)勇氣ある内相

日本唯一の佛舍利奉安塔……………四〇〇

(一)舍利塔の落慶式……………(二)日置禪師の大導師……………(三)宇宙の大活機……………(四)日の本の光

目次終

先づ腹を鍊れ

陸軍中將 堀内文次郎著

上篇 解打鼓

禪機と軍機と商機

一 現代と禪の必要

近來佛敎が政治家、學者、實業家、若しくは青年から著しく注意され、従つて多少の志あるもの間に研究されるやうになつた事は、頗る愉快な事である。佛敎と云ふ中に於ても、日蓮宗、眞宗、淨土宗、

現代と禪の必要

禪宗と宗派は色々にあるが、中に就て現代は禪宗が最も世間から注目されて来た。何故に斯くの如き現象を呈するやうになつたか、是れは其の機運の生れて来た源泉に遡つて考察せねばならぬ。

私から云はしむれば、斯る機運の生じて来た事を専門の僧侶諸氏が考察せなければならぬと思ふが、是の傾向に注目して居る人が頗る少いやうである。何となれば各宗を通じて佛教僧侶の十中の八九迄は死者の葬式、亡靈の法要のみに營々として、讀經をするとか、或は線香を立つるが如き事を主として行ふのみであつて、肝要なる活躍の舞臺たる活社會とは没交渉である。甚しきに至つては、信者の富豪の死するを待つ如き者もある有様である。要するに各宗佛教僧侶の大部分

社會とは
没交渉

が、生命なき死せる佛教の形骸を本尊として尊崇するからである。

又一方に於ては、社會に在りても現今までは佛教を信するものと云へば、多くは愚夫愚婦の類であつた。故に未來の安心とか、西方極樂淨土とかの寢言を有難く信受し、多くも所持せざる金を喜捨し、喜捨の量が多ければ多い丈け樂しき極樂往生が出来ると云ふが如き、誠に果敢なき淺薄なる未來の安樂を希ふ佛教信者のみが多かつた。

然るに今日に及んでは斯くの如き小乘佛教的信仰は、漸く過去に屬し、一面より云へば此の意味に於ける佛教は次第に衰へて行く。而して其の裏面に生命ある佛教が興隆して来たかの感がある。即ち現代の社會の知識階級の者が、求めて佛教を熱心に研究し、信仰するものが

生命ある
佛教

續々として出で來り、中に就て一般が禪學に興味を持つて來た。

二 禪學研究上の注意

此の傾向になつたのは、何故であるかと云へば是れは全く社會の必要から起つた事で、現代の實社會に活潑々地に活躍するには何うしても禪學が必要であると感じて來たからである。是れは恰も鎌倉武士時代に於て、淨土宗とか一向宗とかの他力宗が隆盛を極めて、多く知識階級の低いものから信仰された。少しく語弊があるか知らぬが、殆ど盲目的に信ぜられて居たのである。然し夫れでは自發内展的の獨立の力は斯る信仰よりは到底生ずることが出來得ないと云ふことを、鎌倉

禪學の必要

禪の隆んに なりし 原因

時代の武士が悟つて來た。此の自覺に投じたのが禪宗である。斯くて自力的に動かざること山の如しとか、或は靜かなること林の如しとか云ふ觀念を禪的に求め、市井の巷に立ちながら動中靜ありと云ふやうな強い根柢を捉へようと努めた。是れが鎌倉の武士時代に禪が昌んなつた原因である。今日の社會に於ても恰も鎌倉武士の時代の如く、一般の知識階級が世界の大勢に對抗し、奮勵するには何如にしても根柢が必要であると云ふことに氣が附いて來た。其の一番強き捉へ處を求むるには、佛教、殊に其の中に於ても禪學が最も便利であると云ふ要求より、禪的研究が盛んになつて來たものと考へる。然るに現代の佛教僧侶諸氏の多くが、往昔の無智時代にして、愚夫愚婦が佛教を信じ

百尺竿頭
一步を
進めよ

たる他力専制時代の頭腦を以て、又、其の時代の禪的研究者に教ふるが如き心得にて、今日に於て禪を研究せんとする者を導くやうでは頗る時代を知らざるものと云ふ可きである。今日實社會に於ける禪的研究の必要は、世界的の要求であるから、是れが指導教育の任にある僧侶諸氏も、一段の自覺をして更に百尺竿頭進一步して貰ひたいものである。

三 心膽を寒からしむ

古來からの禪僧の行履を見ると、頗る活機縦横にして、思はず吾人の心膽を寒からしむるものがある。今二三の例を擧げて見れば、北條

昔の傑僧

時頼が普寧禪師に參じて、三舉の下に忽然契悟したるが如き、北條時宗が佛光禪師に參じて膽斗の如き活修養を得たる、將た楠木正成が楚俊禪師に參じて生死交謝の桶底を脱したるが如き勝躅は數ふるに違がない。斯くの如き英雄を打出す處の傑僧は、現代に於て幾人かある。又其の時代の僧侶が懐ける如き大丈夫の覺悟を有する僧侶は、果して現代に見ることを得るか否か頗る疑問である。斯くの如く今日の大勢からは、社會が禪的研究を最も必要と認めて來て居るにも拘らず、一方の宗教家の方が是れに向つて供給する引導力、即ち指導力を充たすだけの佛性を現實せしめて、是れを導いて行くのが幾人あるか、否、今日の時勢に在りては鎌倉時代の高僧以上に有力なる人物が輩出して

心膽を寒からしむ

大に發展せんことを社會は要望して居る。此の意味に於て吾人は現代の宗教界の青年僧侶、殊に専門の大學を卒業せる者とか、有爲なる僧侶に向つて絶大の希望を有するのである。斯く頭燃を拂ふが如き修養を積み、自重し、自奮し、昔時の名僧知識に一步も譲ることなき大開山、大宗匠となるやう蹶起一番して貰ひたいものである。

四 乃木將軍の話

抑々社會が自發し自覺して禪的研究を始めるやうになつたのは、何故であるかと言ふに、我が軍人に就て言へば、普通の戰略とか戰術とか云ふことは獨逸より學んだり、或は他の國から其の方面の知識を取

つて研究して行くことが出来る。然し一番の軍人精神の根本である所の、市井の巷に立つて動中靜ありと云ふやうな湛然の大活機を極めて沈着の中に蓄へる工夫は、何うしても禪定に依らなければならぬ。たとへば戰場に於ては、今や死を決して突撃する時機なりと云ふ刹那に臨んで、其の機會を捉へることは、軍略でも理窟でもいかぬ。是れに一種の暗示的活機を捉へなければ、此の機に臨んで自由なる活作略は出来るものでない。此の場合に處して不動着なる修養は、一番禪を研究することが便利である。故に乃木大將の如き、或は他の有名なる將軍は口にくそ出さぬけれども、又、僧侶其れ自身に參じて禪を研究されぬけれども、山鹿素行の著した書であるとか、或は武田信玄、上杉

謙信等の軍略の書に就て研究して居るが、此等の根柢は悉く禪學に發して居るのである。たとへば乃木大將が身延山に行かれた時の詩に斯う云ふのがある。

孤劍欲窮兵要地。凄風帶雨入山深。

佛意天然
是我心

忽見巨剎聳倚嶮。佛意天然是我心。

此の詩の結句の如きは、確かに天然の禪を得たものと見ねばならぬ。自分の愛兒は二人迄も戦死したにも拘らず、其れを更に意とする處もなく、難攻不落の旅順を攻撃するにも、此の觀念が自然に働いて居る。是れなどは全く無意識的に禪機を獲得して居つたから出來たものであらう。現代に乃木大將の崇拜者は澤山に居るやうではあるが、單に乃

軍機と禪機

木大將を漠然と崇拜し研究するに止つては、利益するところが甚だ少い。分析して研究して行けば、たとへ此の詩一つにでも、無限の禪機が含まれて居ることを觀察するに容易である。斯くて初めて乃木大將に這入るところの山門が打開せられるであらう。軍機と禪機との關係は、日本古來の名將、現在の有名なる將官の事實に考へて見ても、蓋し自明の事實である。

五 七轉び八起きの商人

商機と禪機との關係も亦た斯くの如くである。商業の上に最も注意しなければならぬ事は、道を以て利を取る可きであつて、金を以て利

商機と禪機

七轉び八起きの商人

を取るべきでないことである。支那の堯帝や舜帝を見ても、物質にかけての考は、今日の小賣算より見れば、愚かしい點もあるが、彼等が皇帝の位を取つたのは物質に依つてではなく、寧ろ道に依つて得たものである。即ち時機到來して取るべき道を取つたのである。斯くの如く巨いなる商業は禪機の上に働かなければ、大成功を來すことは困難である。たとへば現代の實業界に於て巨頭と稱せられて居る濫澤榮一、或は益田孝、早川千吉郎と云ふやうな人々に就て見ても、其の言行は禪機に出てゐる。彼等が社會に活潑々地の活機用を現じて、金を儲けたりすることも、禪機より出て居ることは明瞭である。斯る點より現代の若き青年の實業家も、何か捉へる處があつてやらなければ、第一

禪によりて安定心を養へ

に商業に必要である膽力が据らない。一敗すれば忽ち落膽し、失望して何等爲す所を知らぬやうでは實業は到底出来るものでない。七轉び八起きは是れ吾人の探るべき手段である。仆れても猶ほ止まぬ金剛力を振ひ起すには、禪的研究に依つて、自分の安定心を造らへて置かなければならぬと感ずる時代になつたから、實業界に於いては、青年あたりまでも此の禪的研究に這入るやうになつて來たのである。

六 禪の極致

現在に重きを置け

夫れで要するに此の佛教の研究、殊に禪學の研究をするには、未來とか過去とかに重きを置かず、現在に重きを置かなければならぬ。即

ち禪の堂奥は心外無佛の適意であるから、未來の地獄も極樂もあつたものではない。慕直に進まなければならぬ。然も慕直に進むと云つても、矢張り極所に一線道を通ずるの風流が無ければならぬ。勿論、禪を研究しても、本地の風光現前するまでには、時節因縁は確かにある。また大悟一番するまでには因果も歴然として味ますことが出来ぬ。然し其れを現代主義の爲めに働かせるのが佛教の目的、禪の極致である。今日は何うでもよいから、未來さへ幸福であつて呉れよば宜いと云ふが如きは、尠くとも日本の現代に適用すべき佛教ではない。今日の日々の行持さへ眩ます、自覺して自己最善の大努力を傾倒し、日本國家の爲めに活動し、國の富を増進すれば、自分自らも立派なる

禪の極致

成功をして、自らを利すると共に社會をも利益せしめ、所謂自利利他圓滿具足して、以大義人道の爲めに大利益を起すのが佛教の目的、即ち禪の本旨である。此の意味に於て軍機も商機も、其の他の所有の人が此の社會に生活して行く以上は、禪機の活用は實社會の爲めに必要缺くべからざるものである。

時局と國民の覺悟

一 伊軍大敗の原因

昨年十月下旬、イソソソ戦線の伊太利軍が、獨逸軍の攻撃を受くる

伊軍大敗

伊軍大敗の原因

や、恰も富士川の水禽に驚きたる平家の公達も雷ならぬ有様にて、一溜りもなく退却して、忽ち其の中央を突破せられ、敵をして多數の捕虜と戦利品に飽かしめ、一時はヴェニスの危急をさへ傳へらるゝに至り、或は第二の露國を現出するが如き破目になりはせぬかと、一方ならず憂慮したのであるが、倅にして英佛の應援隊も到着し、敵も敢て懸軍長驅するに至らなかつたので、伊太利軍は漸くピアヴェ河右岸の陣地に踏止まることの出来たのは、既に一般人の知る如くである。今伊太利軍が、斯の如き不覺を取るに至つた事に就いて考ふるに、勿論作戦上の原因もあるけれども、其主なるものは士氣の頽廢である。マツケンゼンの名を聞いて、一戦の勇氣もなく、何萬、何師團と云ふ

大敗の原

士氣の沮

逃亡者を出し、所謂、風を望んで潰走したと云ふことは、如何にもあつけなく、伊太利軍の面目にかけて、あり得べからざる事のやうであるが、事實は如何ともなし難いのであつて、當時伊太利軍は士氣が沮喪して居たことは、想像も及ばぬ程甚しかつたのが原因である。

二 米國の舉國一致

以上の伊國に反して今回の大戦に對する米國民の意氣込みは如何であるか。ウイルソン大統領の教書に見るも、『我が目的は戦争にあり』と唱破し『最後の砲門を用ひ盡すまで、戦止まざるべし』と結びたる、如何に時局に對する米國民の決心が高調して居るかと云ふことは

之を察するに餘りあるのであるが、曩に歸朝せる石井特使の一行や、山根代議士の一行から、親しく其所見と感想とを聞くに及んで、米國人が最後の勝利を確信し、舉國一致、軍國の事に努力して、吾人の想像以上に緊張してゐることを具さに知るを得て、聯合軍の爲めに人意を強くするの感あると共に、翻つて我が國民の現状に對し、聊か慊焉の意なきを得ないのである。

米國の武裝

從來僅に二十萬内外の常備兵と、各所に若干の民兵を有するに過ぎなかつた米國が、一朝にして無慮二百萬に垂んとする大陸軍を編成し、其の武裝を完了した。殊に自由主義平和主義の宗家と云はるゝ米國に於て、何等の困難なく、國初以來傳統的兵制の大變革である徵兵令を

發布して、極めて良好の成績を現はしたと云ふことは、誠に驚嘆の外はないのである。而して海軍に至つては、更に大々的擴張の企圖を有し、既に約八百隻の造艦計畫を可決した。尙ほ飛行機の如きも二萬有餘臺の製造に著手し、宛も米國人一手に世界の大戦亂を鎮壓せんとするの概あるは、壯烈と云はんか、將た雄大と云はんか、如何にも目覺ましき極みである。

斯の如く對戰準備の大規模なるに就ては、其の戦費の莫大なるべきは云ふ迄もないのであつて、之れが爲には増税と公債とを以てし、増税の如きは、五十億の戦時税を兩院一人の反對者なく可決したと云ふことである。加之、此の戦の爲には、今後尙ほ如何なる増税をも敢て

増税と公債募集

米國民の節儉

辭さないと謂つて居るさうである。一方公債に對しても亦た同様で、第一回は四十億圓、第二回は七十三億圓であつたが、第三回は更に増加して百九十億圓と云ふことである。回を重ねるに従ひ多々益々辨する勢を示し、非常なる熱誠を以て應募するの狀況は、驚くべき愛國心の發露である。而も國民自らは極めて儉素節約を守り、苟も奢侈に互る事は深く之を戒めて居る。例へば衣服の如きも男女共に從來よりも其の寸尺を縮め、實用上必要でない裝飾に屬するものは一切これを廢し、近來は又絹物を制限するの傾向が著しくなつて來た。尙ほ肉の食用も一週二回に限り、酒は勿論全廢して居る。斯の如くにして其の贏ち得たる所のものを以て、進んで軍事公債の募集に應じ、軍人後

援事業の爲に寄附すると云ふ有様である。此の燃ゆるが如き愛國心に對して、誰か滿腔の敬意を表せぬものがあらうか、話を聞くに欽仰の念に堪へない次第である。

三 我が國民性の墮落

然るに退いて我が國民の情態を見るに、私は殆ど之を云ふに忍びないのである。近頃の流行語である『成金』と云ふことは、決して品のよい言葉ではない。私利私慾の外何物もなく、此の國家の大危局に處して、無關心、無自覺なる標語の如く感ぜられ、尊敬すべき我が實業家に對して、これ程侮辱の語はないやうに思はるゝに、一向それを咎

「成金」は無自覺の標語

我が國民性の墮落

墮落の象徴

時局と國民の覺悟

むるものもなく、之を口にし、之を筆にして平氣で居るばかりか、今や國民羨望の意味に進み、成金と云はれたい、成金になり度いと云ふことにまでなつたやうであるのは、我が國民性の墮落を象徴して餘りあるにあらずや、一夕の豪遊に千金を擲つものはあつても、公共の爲めに、將た國家社會の爲めに畫策せざるは果して何故であらうか。歐米の人士は『個人の自由は國家の獨立と併進せざるべからず、利己主義は國家の獨立と離るべからざるものなり』と爲し『國、義を以て利と爲し、利を以て利となさず、他を利するは己を利する所以なり』と云ふが如き、正大なる觀念を以て其の産業に従事して居る。即ち彼等の富を作るは、獨り自己の逸樂を恣にせむが爲にあらずして、寧ろ國

近來の快心事

我が國民性の墮落

家の爲に貢獻し、公衆の爲に盡さんことを欲しての故である。是に於て歐米の富豪は、或は教育事業の爲めに、或は慈善事業の爲めに、或は又一步を進めて、世界人類の平和の爲めに、若しくは世界の文明の爲めに、争つて巨額の寄附を爲すのである。近くは彼のヘボン氏が、日米兩國の親交増進に資する所あらむことを欲して、斯道の先覺たる澁澤男に話し、我が東京帝國大學に私財十二萬圓を寄贈して、米國講座の新設を見るに至つたるが如きことも、實に其の一例である。曩に山下龜三郎氏が國防費の爲めに百萬圓を寄附せられたる如きは、近來の一大快心事にして、我が實業家の爲めに、聊か氣を吐くに足るのであるが、一般の好尚は、未だ米國の如くなるに至らず、頗る寥々の感に

金を儲けるは目的に非ず

時局と國民の覺悟

二四

堪へない。歐米人の金を儲けるのは、手段であつて目的ではない。然るに日本人の多くは之に反して金を儲けること其れが目的であるかに見える、厨川白村氏は『米國の大學教育』と題する記事中に、
或る皮肉屋が慫う云つた、中世の昔歐洲の諸侯が都市を攻略するに虐殺を行ひ掠奪を縱にして、之を己が所領としたる後には、必ず其町に寺院の建立をする、自分の犯した罪の恐ろしさに、慫うして神様と仲直りをしようとするのだ。米國富豪の寄附も矢張り此類で盛に私利私慾を逞うした揚句、病院や大學を立てよ神様の御機嫌を取るのだらうと。しかし盛に惡辣手段を用ゐて私腹を肥しながら飽くまでも獨占主義を固持して、神様の御機嫌をさへ取らうとしな

い横着者に比すれば勝ること實に數等ではないか。

と謂つて居るが、私は我が實業家中に、惡辣手段を用ひて金儲けをする者があらうとは、斷じて信ぜられぬけれども、公共事業に對して、就中、國家の存立上最も緊要なる我が精神界の事業に對する熱心が、米國富豪の其れに比して、多大の遜色あるを否定することの出來ぬのを、深く悲しまざるを得ない次第である。

四 他山の石以て我が玉を攻くべし

昔支那に王戎といふ吝嗇漢があつた。彼は自己の苑内にある李が、非常に甘味のものであつたので、他人が其の種子を竊まんことを氣遣

吝嗇の鄙

他山の石以て我が玉を攻くべし

二五

ひ、一々其の核子を打碎いたと云ふことである。これは随分極端な話であるが、我が國民中にも、往々此の類の獨占主義者のあるを否むことが出来ぬやうに思ふ。名畫も博物館で見たのでは興味が無い。己の庫の中に秘藏して、始めて愉快とするが如きが其れである。自己の歡樂のみ是れ圖りて、衆と共に樂しむことに思ひ及ばぬのは、畢竟獨占主義の弊であつて、彼の王戎の鄙吝と擇ぶ所はない。私は米國入の愛國心が、偶々時局に觸れて發揮し來り、恰も燎原の火の如く、其の勢の極めて猛烈なるを聞き、從來『舉國一致』なるものは、日本國民の專有であるかの如く思惟せられて居たものが、今や却つて此の美風は我が國民の爲めに、逆輸入をなすの必要あるを感するのである。王戎

獨占主義の弊

のやうに、其の傳播を防ぐ爲めに、李の核子を打碎くの愚なるは云ふまでも無いが、折角自己の持つて居る李を枯らして仕舞ふことは、更に愚の至りではないか。

今回の戦争が如何なる結果を以て終局するか、固より逆睹し得べきにあらざるも、將來の平和が依然として武裝的平和であり、今後の戦争は、更に一層宏大なる規模を以て、戦ふに至るべきことに就ては、殆ど何人も異論なき所である。加之、今日世界の形勢は、外交關係上茲に露骨に述べることには出来ぬけれども、我が帝國の立場は、頗る重大なる意味に於て推移しつゝあるのである。故に我が國民は今日より十分に其の覺悟を以て居らねばならぬ。伊國の蹉跌と米國の緊張と

他山の石以て我が玉を攻くべし

我が國の立場

殺人刀活人劍

他山の石

は、蓋し我が玉を磨くべき他山の石であると思ふ。

殺人刀活人劍

一 禪學と日蓮の流行

此頃は禪と日蓮が流行し、ヤソも面白くないし、天理教もあきが来たと云ふ風に、少しハイカラなものは禪の方に赴き、それより低く日蓮に走り、朝から晩まで太鼓を叩き題目を唱へると云ふ有様である。また禪を修行するものも、何うも健康がすぐれぬから禪をやらうとか気がフサいで困るから禪を修するとか、或は交際の爲めに、或は面白

野狐禪は
危険

半分と云ふ風に、それ〴〵禪を聞き嚙つて、何か奇妙に人より變つたことでもするのが禪のやうに考へて、あの男は禪をやつて居るから變つてゐるなどと云はれて、それで得々として居るやうな人が多い、そしてかゝる人々は眞に參禪でもしてゐるかと思れば、禪の提唱の二三回も聞き嚙つたり、暑中休暇を利用して一週間も鎌倉あたりへ行つてそれで禪語の二つ三つを覺えたのを振り廻はし、禪者振つて居るやうな有様である。尤もかゝる風も、酒樓に登つて酒を飲んだり、洋食屋の女と拳をうつたりするよりは遙に優つて居るが、禪も下手に眞似をするとはやはり危険を伴はぬとも限らぬ。故に吾人は如何にしても禪の専門家のやうに打坐をそれ事とするとは出来ないから、極く平易な

殺人刀活人劍

禪の語録ものを専門家から教へて貰つてそれを讀み、解らぬところは質問し、學業や自分の仕事を放却せざる範圍に參禪して意志の修練を積むやうにしたいものである。

二 絶對無限の道

全體禪は言語文字を以て説明し得べきものではない。言語はたゞ吾人の差別界の事相について、その意味を表す爲めのものであつて、禪のギリ／＼のところは、とても理窟や文字で説明が出来ないのである。禪は直覺的に之を攫まんとするのである。何故禪はこれを直覺的に攫まうとするのであるかと云ふに、天地は道と一體なるものにして道は

不立文字

我は道なり

天地を包容し、然かもまた一微塵も道ならぬものはないのである。故に宇宙間に存在するもの一として道の當體、絶對無限の道でないものはない。我々は一度徹底した反省の力に依頼すれば、心の奥に一道の光明がさして、我は道なりと云ふ、此の小なる我が絶對であり、無限である眞境を攫むことが出来る筈だと云ふのである、此の反省の力攫む力を得せしむる手段を禪と稱するのである。佛教各宗のやうに理窟や哲學から這入り、これを領會し、考察して次第に進むのではない。最初から慕直に攫むのである。こゝが説くことも、書くことも出来ない所であるから、禪は不立文字であるとか、教外別傳であるとかと云ふのである。故に僅か一週間や二週間の講釋を聞いて、それで禪

絶對無限の道

が解つたと思つたり、或は一つや二つの公案が通つたからと云つて悟つたと思つては、それは大なる誤解です。

三 言語思量を超越す

禪の言葉に「口を開き得ざる時無舌人解語す、脚を擡け起さざる處無足の人行くことを解す、若し也他の穀中に落ち句下に死在せば自由の分ありや、四山相逼る時如何」と云ふ句がある。これは禪のノツビキならぬところは、説明の邊を離れたものであるを示したものである。今此の句に即して自分の素人禪の解釋を施して見ようと思ふ。「口を開いて得ざる時無舌人解語す」とは禪のギリ／＼のところは思

禪のギリ
のギリ
の
と
の
と
の
と

量分別を以ては説明が出来ないと云ふことを示したものである。

「佛の一字も心田の汚れ」と云ふことがあるやうに、佛と云ふも假の名である。それに佛と云ふ名をつければ、それはすでは心田の汚れである。佛教で好くこれを背觸に涉らずと云ふ言葉で説明して居る。禪は背觸に涉つては説明が出来ない。故に背觸に涉らないで、スラ／＼と説いて行くには、何しても舌の無い人でなければならぬ。禪宗の寺院へ行くと弓の折れで拵へた三尺ばかりのもので、箴子と云ふものがある。あの箴子を首山主と云ふ和尚が或る時大勢の坊さんの中へ持ち出し、

「呼んで箴子と爲すか、呼んで箴子と爲さざるか、若し之を呼んで箴

言語思量を超越す

禪は背觸
に涉るべ
からず

子とすれば即ち觸る、若し之を呼んで篋子にあらずとすれば即ち背く、此の間に亘つて何とか云つて見よ」

と言つた。この質問には大勢の坊さんであつたが、誰一人答へることが出来なかつたと云ふ。これは禪の當體を言葉で云ひ詮すことが出来ないと云ふ證據である。道は大きいとか、道は絶對だとか云つても、それは差別界の事物に關する考を基とし、比較的に形容して言ひ、思ふ丈のことで、本當にその大、その絶對が明瞭に攫へられるものではない、例へば道は大なりと云つても、それは如何程大きいのであるか、その大きさは宇宙に瀰漫し、宇宙と共に大きい。そんなら其の宇宙の大きさはどの位あるかと云へば、無限と云ふより外はない。無限と云

無限

絶對

ふことは、到底吾人の考へ得らるゝ範圍を越えて居る。我々は有限の世界に住する故に有限のことより知らぬ。宇宙の大きさは、此の位であると云へば、その大きさは果して何うなつて居るのであらうか、そのさき、そのさきと考へて行けば、無限に考へて行かねばならぬ、その無限の無限は到底盡すことが出来ないものである。絶對と云つても矢張りさうである。我々は相對より知らない。すでに相對がある以上は絶對も無ければならぬ。然し無限が解らないと同様に絶對も解らない。獨り大が絶對ばかりではない、小も相對も同じである。道は宇宙と共に大であるばかりでなく、芥子粒の小なるものも、決して道を離れぬものである。イヤ芥子粒どころではない。何千倍の顯微鏡でも見るこ

言語思量を超越す

の出来ない様な小さいものでも、將た無限小まで行つても道は決して離れない。即ち小もまた無限である。相對も分析し分析して行けば行くほど相對で絕對には達しない。相對もまた無限に相對で究極がない。かゝる大とか絕對とか無限とか云ふ言葉で形容さるゝ道の當體は、到底言語思慮を超絶して居ると云ふの外はない。

四 文字以外に合點せよ

瀧山

故に禪の當體は口を開いて説明の出来ぬものである。此處で瀧山の靈祐禪師の話をしなければならぬ。此の和尚は百丈禪師の弟子で瀧山と云ふ山を開いた有名な禪僧である。或る時司馬頭陀と云ふ人が、百

丈禪師に向つて云ふには、

『瀧山と云ふ山は禪の修行には理想的な山で、裕に一千五百人は收容することが出来る。それが現在には誰も開く人が無いからつまらぬ山になつて居るけれども、後には必ず立派な山になる。誰か良い人を彼處にやりたいものだ』

と語つた。百丈和尚は、

『それでは納が行かうか』

と云つた。する 司馬頭陀は、

『尊公は悟つて居るが貧乏性だから行つても仕方があるまい、他に誰か無いか知らん』

文字以外に合點せよ

と云ふ。そこで百丈は、

『それでは私の弟子の靈祐和尚をやつて見よう』

と云ふことで、靈祐が如何程禪が出来て居るかを試験することになつた、この試験がまた面白い、傍にあつた淨瓶を靈祐のもとに持ち出し

『呼んで淨瓶と爲せば即ち觸れる、呼んで淨瓶とせなければ即ち背く、

如何んか消息を通じたものであらう』

斯う云ふ試験である。若し淨瓶と云へば觸れる、淨瓶でないと云へば

背く、なるほどこれは難問に相違ない。

然るに靈祐和尚は此の質問に如何答へるかと見てみると、有とも無

とも答へず、イキナリ足をあげてその淨瓶を蹴倒して仕舞つた。淨瓶

何物ぞ、そんなものは私の眼に觸れるものか、これが靈祐和尚の心で

ある。そこで靈祐は此の試験に及第して瀉山に登り庵を造つて坐禪し

た。食物は團栗などであつたが、その道譽を慕つて登る者多く、忽ち

にして一千五百人を容れる山となつた。禪は到底有句無句を以て説明

が出来ず、絶對や相對を以て述べられぬことは此處である。口を開い

て呼んで如々とすも早くこれ異りと云つた通り、口を開くことの出

來ないものが此處にある。此處が背觸に涉らずして消息を通ずる無舌

人でなければ出来ない。尋常一様の舌では説明されぬ。然し舌の無い

人は世界にない、舌があつても無舌人になれぬことはない、釋尊の説

法は無舌人の説法である。釋尊は四十九年の間或時は有と説き、或る

文字以外に合點せよ

三

無舌人の
説法

時は無と説かれた。その言葉の上は無の語はあるけれども、説いた言葉に要事はない、釋尊は活きた佛法を死せる言葉を以て自由自在に説いて居られる。釋尊が諸弟子に向つて、

『我法は妙にして思議し難し』

と仰せられながら、法華を説いて居られる。それが無舌人の言葉で、その言葉に何も意味がない。背觸に涉らずして消息を通じて居るのである。或る時は有と説き、或る時は無と説いて居る。これが背觸に涉らぬ所以である。されば禪は言葉以外に合點しなければならぬ。

五 門を叩くの瓦子

言葉は不自由なもの

言葉は誠に不自由なもので、有と云へば有になり、無と云へば無になる、何れかに偏して仕舞ふ。然るに意と云ふものは無限のもので、無限の意を有限の言葉で説明することは一部の説明は出来ても、その全體を説明することが出来るものではない。譬へて見ると生れながらの盲人があつて、八月十五日夜の月は大變美事だと云つて人が騒ぐけれども、一體月と云ふものは何ういふものか解らない。そこで女房が月と云ふものを知らせるには如何したら宜しからんと考へたる結果、金盃を持出して、月といふものは斯んなものであると言つて話した。是は何も月と云ふものは鳴るものだと云ふのではない、圓いことを示すために金盃を示したに過ぎない、けれども月は唯圓いばかりでない、

門を叩くの瓦子

清淨な光りのあるものである。金盃はたゞ圓いと云ふだけのことで清
いことは示されぬ。恰も言葉も斯くの如く一部だけの話に止つてゐる。
全體限りある言葉を以て、限りなき意を盡すことは無舌人でなければ
出来ない。そこで石頭大師も、

『言を承けては須く宗を會すべし』

と云はれた。文字や言句に執着して仕舞ふと、その文字言句は死句と
成つて仕舞ふし、之に反して佛祖の本懐、禪の正當に達すれば、一千
七百の公案も、五千餘卷の經論も、皆悉く活句となる。されば佛祖
の言句は月を指すの指であり、門を敲くの瓦子である。但し月を指す
の指、門を敲くの瓦子もまた必要である。たゞその月を合點すれば指

言句に執
着するな

に用はなく、門内に答へあれば瓦子には用はないのである。故に樂山
大師は、

『言語を絶却すること勿れ、我れ今這箇の語を説きて無語底を現す』
と云はれて居る。有言語を以て無言語底を現すのが佛祖の言語である。
此處が即ち「口を開き得ざる時無舌人解語す」と云ふ意味である。

六 生死の中に無生死あり

次に「脚を擡け起さざる處無足の人行くことを解す」これは禪の應
用自在なることは到底脚を擡けて足踏の出来ない所があると形容した
ものである。三昧とか一如とか如同とか云ふ禪語は、此處の當體を説

生死の中に無生死あり

殺人刀活人劍

明したものである。洞山大師に或る坊さんが、

『寒暑到来如何んか廻避せむ』

と問うた。人間何時も春風駘蕩の春ばかりではない、金をも爍かすやうな夏も来れば、五體を凍らすやうな冬も来る、諸人は之れは平々凡々何れも廻避だの避寒だつと騒ぎ廻ることはないが、若し生死到来の時は如何いたしたものであらう、迷悟到来の時は如何いたしたものであらう、それも普通一様のこととして洒々落々と死を見ること歸するが如く、迷苦を見ること歡樂に對する如き大覺悟ありや否やを自分自分胸に問はねばなるまい。時に洞山和尚は、

無寒暑の處

『無寒暑の處に向うて去れ』

と云つた。寒い熱いと云ふなら無寒暑の處へ去るがよろしい。生死煩惱が怖ろしければ、無生死無煩惱の處へ去るが宜しいと云ふのである。そんな暑くも寒くもない處があるから其處へ行くが宜しいと云ふが、そんなところが何處にあるであらう。その無寒暑の處は遠方にある譯ではない、眞に寒暑の世界の眞唯中に無寒暑の處があるのである。同じく洞山大師の云はれたる言葉に、

萬里無寸草の處

『萬里無寸草の處に向つて行け』

と云ふ言葉がある。草の一本も無い所があるから、この萬里無寸草のところに向つて行けと云ふのである。何處に萬里無寸草の處があるであらうか、天地の間に萬里も草の生えないと云ふ處があるまい、ゴビ

生死の中に無生死あり

の沙漠へでも行つたらそんなところも見當るか知らぬが日本のやうな細長い國には見あたりぬ。然し今はそんなことを云つたのではない。此の世界の草蓬々と生えて居る中に萬里無寸草のところがあると云ふのである。即ち脚を擡けて足踏の出来ないところ、これは吾人が一步歩歩くところに萬里無寸草のところがあるのである。洞山の弟子に曹山と云ふ偉い和尚が居た。此の和尚が洞山のところへ暇乞ひに行つて、

『私は是れから餘所へ行つて來ます』

と云ふ。それで洞山は、

『それでは何處へ向つて行く』

不變易の處

と尋ねると、曹山は、

『不變易の處に向つて去る』

と云つた。全體不變易のところと云ふものは何處にあるであらう。チヨツと見ると世界は悉く變易の世界に見える。暑いと思つて居る内に寒くなる、花が咲いたと思つて居る内に散つて仕舞ふ、若いと思つて居る内に老人になる。世界の何處を尋ねても不變易のところはない。それで洞山は、

『全體何處が不變易の處であるか』

と尋ねた。すると曹山は、

『去るもまた不變易』

生死の中に無生死あり

と云つた。不變易のところと云ふものは遠方にあるものではない。眞に變遷窮りなき世の中、眞只中に不變易の處があるのである。遠方には無い、皆足下にあるのである。斯ることは大抵の人の脚を擡け起さざる處で、これは一通りの修行では歩けるものではない。所謂脚を擡け起さぬ處が萬里無寸草のところであり、無寒暑のところであり、また不變易のところである。お茶を呑み、御飯を食べる、平常の日用の事に就て、執著を離れて見たならば實に一步々々無寒暑の處であるに相違ない。靴の良いのを買つて玄關に脱いで座敷に通る、そして己れは靴を彼處へ置いて來たが、誰かあれを穿いて行きはしないかと靴に執著する、それは無足の人でない有足の人である。これでは萬里無寸

何でも成
しまへ

草のところと云ふことが出来ない。執著なければ穢土も淨土となり、執着あれば淨土も穢土となる。この迷を一つ離れて見ると眞に變易の世界の眞中に不變易のところがあり、草蓬々たる野原の處に無寸草のところがある。寒暑の眞唯中に居つて寒暑が邪魔にならぬも同一である。然らばその無寒暑のところは何處にあるかと云へば、暑い時には暑いになり切り、寒い時には寒いに同化して仕舞ふ。即ち何でも成り切つて仕舞ふのである。お茶を呑む時にはお茶を呑むことになり切つて外念に涉らない。然るに仕事をしながら外の仕事の事を考へたり、床屋などはその仕事になり切らぬから外見などをして遂にお客の顔を切つたりする。おサンなどでも仕事になり切らぬから、大切な茶碗を

生死の中に無生死あり

軍隊禪

洗あらひながら粗そ忽とつをしてお神かみさま様に罵ののしられるのである。軍人ぐんじんであるなら軍隊ぐんたいになり切るがよい、軍隊ぐんたいになり切れば、檢閱けんえつだからと云つて狼狽らうはいすることも無なければ、查閱さえつだからと云つて堅かたくなることはいらぬ。このなり切るところに軍隊ぐんたい禪ぜんの趣おもむきがある。戦争せんそうに出たら戦争せんそうになり切るがよろしい、すると大砲たいほうの音おとも苦くるにならぬ。こゝに自ら戦争せんそうに勝利しょうりを得る道理だうりがある。執着しよくちやくするから軍隊ぐんたいがイヤになつたり、戦争せんそうが恐おそろしくなつたりする。執着しよくちやくとは足下あしもとに氣きをつけて、その足あしのからまりを取ることである。されば足あしにからみつくいろくゝの五色しきごの糸いとは速すみやかに截斷せつだんするがよろしい。見みたい、食くひたい、遊あそびたい、飲のみたい、これ等の欲よく望ぼうは悉ことごとく足下あしもとにからみつく五色しきごの糸いとである。この糸いとを絶たつて仕舞しまはね

殺人刀活人劍

無足の人となれ

ばならぬ。五色しきごの糸いとに引ひつばられて居ゐるうちは、無足むそくの人ひとと許ゆるすことが出来でない。吾人ごじんは足あしの五色しきごの糸いとを絶たつて、鳥とりの空そらを行ゆくが如ごとく、魚うまの水みづを行ゆくが如ごとく、無足むそくの人ひとにならねばならぬ。

曹洞宗そうどうしゅう開祖かいそ道元だうげん禪師ぜんじに「坐禪ざぜん箴しん」と云ふものがある。そこに此處こゝの道理だうりを述べて斯かう仰おほせられてある。

佛々ぶつごの機要きえう、不ふ思量しりやうにして現げんじ、不ふ回互まごにして成じやうず、不ふ思量しりやうにして現げんず、其その現げん自おのづかし親しんし、不ふ回互まごにして成じやうず、其その成じやう自おのづかし證しやうなり、其その現げん自おのづかし親しんし、曾かつて染汚せんわ無なし、其その成じやう自おのづかし證しやうなり、曾かつて染汚せんわ無なきの親しん、其その親しん委あすること無なくして脱落だつらくす、曾かつて正偏しやうへん無なし、其その證しやう、其その證しやう圖ずること無なくして脱落だつらくす、曾かつて正偏しやうへん無なきの證しやう、其その

生死しやうじの中に無な生死しやうじあり

殺人刀活人劍

五二

證圖ること無うして工夫す、水清うして地に徹し、魚行いて魚に似たり、空闊うして天に透る、鳥飛んで鳥の如し。執着を離れて仕舞へば斯くの如く自由自在である。即ち茶に逢うては茶を喫し、飯に逢うては飯を喫する上にも禪は備はる、若し執着すれば飲み過ぎたり、食ひ過ぎたりして、遂には大病大患を來すことになる。

七 原坦山美人を抱く

次に『若しまた他の穀中に落ち、句下に死在せば豈に自由の分あらんや』と云ふのであるが、穀とはヤゴロと云つて弓と弦との間を云ふ。

原坦山

即ち穀の中に落ちて仕舞へば、動きが取れなくなつて、自由自在の働きを現はすことが出来ないといふ意味である。これを句下に死在するといつたのは、文字に執着することを云つたものである。或は有と云へば有の句に著いて仕舞ひ、無と云へば無の句に執着して仕舞ふ。色と云へば色に著いて仕舞ふ。されば此處に面白い逸話がある。原坦山も久我環溪も曾ては共に相模成願寺の風外老人に同參した人であるが、此の二人の若い時の話に、二人が一所に諸國を行脚された。或る日話しながら或る小河の所へ來た、常はチヨイと飛び越えるによい程の小さい川であるが、折悪しく雨上りで水が増し、女などはチヨイと越え難い。そこへ一人の小娘がやつて來て、行き悩んで居る。これを

原坦山美人を抱く

五三

見た坦山はニツコリしてその女を抱いて渡してやつた。そして知らぬけに二人は歩いて行つたが、環溪は出家の身として婦女を抱くことを面白からず思つて、ロク／＼挨拶もせず次宿まで来て、坦山に向ひ、

『出家の身として何故美人を抱いたか』

と答めると、坦山は笑ひ出して、

『貴公はまだあの女を抱いて居つたか、おれはあの時に放下してしまつたよ』

と云つた。美人にあつたとて美人に執着し、甘いものを食つたとて甘いものに執着し、何時までも其のものを心に止めて居る、これが執着で

ある。どうも此の句下に死在すると云ふことはいけない。故に趙州和尚は、一僧が、

『狗子にも佛性ありや』

と云へるに對しては、

『有』

と答へ、また他の一僧が同じく、

『狗子にも佛性あるか』

と云へるに答へて、

『無』

と云つてゐる。これは學人の有無に執着することを忌つて斯く兩頭を

原坦山美人を抱く

截斷せしめられたものに外ならぬ。無と云ふも有と云ふも言句葛藤にして、その本旨は有無を超越したところに存するのである。すべて拘泥して仕舞へば本意を合點することが出来ない。本意を合點せざれば活句も死句となるのである。

八 冷暖自知

禪の公案に『南泉斬猫の話』と云ふ有名な公案がある。南泉は池州南泉の普願禪師のことで、馬祖大師の法を嗣いで達磨九代の孫となつた人である。或る時の事であるが南泉の會下に集つて居る坊さんの内で、東堂と西堂とが二派に分れて大争論が始まつた。大衆が一疋の猫

を捕へて来て、『猫にも佛性がある』『イヤ猫には佛性はない』と云つて頻りに争つて居た。南泉はこれを遙かに見て居たが、イキナリ其處へやつて来て、その猫を奪ひ取り、

『道ひ得ばすなはち斬らず』

若し猫に對して有無を超越して更に云ふことが出来るものがあつたらこの猫は無事にして置くが、若し云ふことが出来ないに於ては止むを得ぬから斬つて仕舞ふぞと云ふのである。ところが今までつい無だの有だのと強ひて争つて居たものが一時に静まり返つて、誰一人そこへ出て来て此の質問に答へるものがない。そこで止むを得ず南泉和尚は此の猫を眞二つに斬り捨てて仕舞つたのである。ところが其の夕方に

殺人刀活人劍

五

なつてから趙州和尚が外出先から歸つて來た。南泉和尚も殘念だつたと見えて此の事を趙州に物語ると、趙州は自分で履いて居た履を脱いで頭上に載せ、フラリと其處から出て仕舞つた。南泉これを見て手を叩いて感心し、

『あゝ趙州があゝの時に居てあつたら、猫兒は助けられたものを、殘念なことをしたものである』

と云つたと云ふ。これは全體何を説明したものであるかと云ふに、やはり言句に滯つては禪の本領を會得することが出來ないと云ふことを説いたものである。然るに趙州の如き偉い坊さんになると、死句も活句となる。言詮不及のところに向つて一條の鐵路を開いたやうなものであ

る。こゝの道理に意がついて見れば、鳥の聲、水のひどきも悟りの縁とならざるものはない。支那に玄沙と云ふ和尚が居た。此の人は三十年まで父親と共に南臺江のほとりで魚を取るのを商賣として居た。或く夜江へ船をやり、二人で魚を釣つてゐる内に、父親は過つて水中に陥込んだ。そして急流であるから、忽ちの内に流されて、その落ちたところに月が映つてゐた。その時に玄沙和尚は、

『一切諸法はすべて水中の月のやうなものである』

と感じて、雪峰山へ登つて坐禪した。しかし容易に悟ることが出來ない。或の時一つ餘處へ行つて修行して來ようと思ひ、山を下つて來た。朝早くであつてまだ脚下もよく解らぬ程であつたものだから、チヨツ

殺人刀活人劍

卷

と石に躓いた。その時、

『痛い！』

と思はず叫んだ刹那に於て『あゝこの痛みは全體何處から來るか』と斯う悟つたのである。こゝは分別の及ぶところではない。勿論説明も出來ない。こゝが禪の面白いところである。こゝになると冷暖自知である。人はよく暖いとか冷たいとか云ふが、それならばドンな風に暑いか、ドンな風に寒いかと押し詰めて行けば、遂に説明が出來なくなる。また此の山椒はピリ／＼してからいと云ふ、それではどんな風にからいか、ピリ／＼とからい、ピリ／＼だけでは分らぬ。イヤやつぱりピリピリするのだと云ふ風に、いかに説明しようとして手ぶり身

冷暖自知

ぶりして示しても對手には解らぬ。それであるからボンと頭を叩きつけてやる、痛いと氣がつく、口で云つてはこれより説明が出來ない、それよりどうピリ／＼するか自分で食つて見ると云ふ風になる。こゝの道理は、心行處滅にして到底一様の知識を以ては説明することが出來ない。

九 臨機應變

無有變易

涅槃經に斯う云ふ句がある。『如來常住無有變易』如來と云ふものは常に住して居つて決して變ることが無いと云ふ意味である。この言葉は誠に禪の本懷を云ひあらはしたものであるけれども、眞に佛の本意

臨機應變

六二

斷常の二見

殺人刀活人劍

を合點し、佛法の本意を合點しなければ常見に陥る、佛教では斷常の二見を立てて常見に傾くのも、また斷見に傾くのも共に誠めて居る。常見と云ふのは世の中を常にあるものとして、自分の身體は死んでも、この魂は永久に世界に残つて居るものであると感ずるのである。即ち梵網經の中に、

「一度び人身を失へば、萬劫に歸らず」

と云ふ言葉が出て居るが、これを文字通りに解釋すれば斷見に陥る。此の斷常の二見は共に佛法ではない。されば前述の如く「有る」と見るのも間違ひであれば、「無い」と見るのも間違ひである。佛法は此の斷常の二見を離れたものである。されば若し句下に死在すると云つて、

臨機應變

言葉ばかりに執着すれば、活句も死句になつて仕舞ふ。佛の言葉は悉く活句であるけれども、其の本意を得ざれば死句になつて仕舞ふ。何でも人の言葉にばかり執着しては今日の世の中は特にあてにならぬ。向ふの本意を知つて此方が應接して行くやうにせねばならぬ。これを禪では臨機應變と云ふ。この手段がなければ到底死中に活を得るなど云ふことは思ひも寄らない。若し此の妙用を具へたものであれば、生死岸頭に立つても狼狽することがなく、時に臨み如何なる場合に處しても自由無碍に活動し得るやうになる。そして自分では格段の注意を用ゐるに思ひのまゝに立ち居振舞つても、それがそのまゝに法性に順じ、法本に背かぬものであるから、天馬の空をかけるが如く、如何

臨機應變

にも心持ちのよいものである。隨處に蓋天蓋地し、順境に在りても逆境に處しても、悲しい時、嬉しい時、面白い時、面白くない時、生に處しても、死に處しても、到る處青山ありで、處に隨つて自由自在である。然し眞に此の活機輪を手に握つて居なければ、一少些事にも驚動して度を失つたり、色を失つて更に施す術なしと云ふ見苦しい有様を演出せねばならなくなる。最近の武人としては山岡鐵舟の如きは全く禪の實踐躬行が出来て居た。或る日鐵舟の第宅へ目黒の雲照律師が訪ねて來た。律師もあれだけの人であるから、心に何か巧智を以て訪ねて來た譯ではあるまい。つまり徒に他宗を説破しようとか、自己の聲價を知らしめんといふやうな考はなかつたと思ふ。ただ行法一如

何ぞ戒律
を要せん

で無邪氣に、眞面目に思ひ立つて偶然にも鐵舟を訪ねられたものであらう。律師即ち喜びの色を現して鐵舟を見、徐ろに戒律の尊いことを一巡説し、その受戒を懇ろに勧めた。鐵舟は始めから終りまでちつと聽いて居たが、この時忽ち口を開いて、

『此の無念の當體に何の戒律が要るものですか』

とやつたので、さすがの律師もグツと詰つた。すると鐵舟は侍者を呼んで、

『俺は空腹ぢやから晝飯の膳部を持つて來て呉れ、しかし客僧へ出すのでないぞ、俺のだけ持つて來い』

と命じたので、少時して膳部が一人前來た。それを鐵舟は獨りでムシ

ヤク食ひながら律師に向ひ、

鐵舟の追

「律師、お答へは如何で御座る」

と追求した。鐵舟の此の追求は何時も猛烈で、何人に對しても無遠慮でやつたものださうだ。此の追求に遇つた律師は殆んど色を失つて、前額から玉の汗を落し、一言半句も出ない。進退谷まつて活路を得ることが困難なる状態に陥つた。見るに見かねたる律師の侍者大橋某は機轉を利かして、

「本日律師は微恙で御座れば、いづれ日を改めて訪問仕る」

と云つて、師を擁しつゝ倉皇として歸り辭したと云ふ。律師は彼ほどの高僧であつたが一點法欲が残つて居た。鐵舟に十分なる禪の修練あ

り、識見あるのを猶ほ且つ自分の宗風の下に引きつけんとしたのは、師に法欲があつたことを證明するものである。それにつけても鐵舟がよく佛心を體得し、寸分も心に隙の無かつたのは、確かに臨機應變の自由があつたからであらうと思ふ。又或る日教僧が訪問して來たことがあつた、鐵舟の前で頻りに佛教の深旨を講じ、救世の急務を談じ、最後に自己の信仰の精髓を纏説してアツバレの金言名説、滔々板水の流るゝ如くやつてのけた。漸く説き終るを待つて靜かに身を起したる鐵舟は開口一番して、

「それは佛法の道程であるが、俺は道程は左右を論ぜぬ、唯だ佛を見せて貰ひたい、佛とは如何なるものか、即今見たいものである」

佛を見た

とやつた。すると此の教僧も忽ち口を噤んで一言もなく、折角の兜も脱ぎ旗も捲いて徐ろに黙禮して去つたと云ふことである。此の教僧は立派なる信仰を持つて居ることを告白して居ながら、たゞ一句鐵舟の問話に窮するやうなことではいかぬ。若し此時に教僧が「佛とはどんなものだ」と質問された時に、「佛を知らぬか、佛とは這んなものだ」と云つて卓子でも叩いて應答したら、鐵舟も「イヤ俺の佛法も同然ぢや」と云うたでもあらう。惜しいかな此僧に此の眞體を好契するだけの腹が無かつたから散々の體で引退つた。山岡鐵舟の如きは實に無念無想の當體を究め盡して居るから、何時如何なる事に遭遇してもビクともしないのである。されば鐵舟はいよく自分が死ぬと云ふ場合に

鐵舟の臨終

臨んでも、決して大藏經の書寫を止めなかつた。ところが手がシビレて筆が運べないので、侍者がスツと鐵舟の手を紙の面に持つて行くと書體が平常の如くで寫され、いよく最期の時は悠々として風呂に這入り、體垢を洗ひ落し、心身を清淨にして、眠るが如く往生したと云ふ。鐵舟は一刀流の達人であつたことは何人も知るところである。武術の奥儀も心膽を鍊つて深重に修養を積むのであつて、愈々その堂奥に進めばもう劍を離れ、人を離れて仕舞ふ。心外無別法の極則が武士道の妙味である。今鐵舟の例に見る如く、何事によらず自分の方に一物があれば、轉身自在の作略を現すことが困難である。一物を心に残すとは、穀中に落ちて匂下に死在するの人であつて、未だ自由の分な

殺人刀活人劍

七〇

きものである。言葉にばかり拘泥すれば或は斷見或は常見と云ふ穴に落ちてしまひ、穴に落ちれば活潑無礙に行く譯に行かない、自由の分がない。されば禪は活きた句を直接自分の心を持つて來てナルホドと徹見するところにあるのであるが、それは説明が出來ない。説明すればやつぱり話頭に落ちて仕舞ふ。ことに至ると何とも云ふことは出來ない。云つてもそれは草を打つて蛇を驚かすやうなものであらう。

一〇 老山能壞少壯

次の句は『四山相逼る時如何んか透脱せむ』と云ふことである、この四山とは阿含經の中に斯う云つてゐる。

(一) 老山能壞少壯

(二) 病 山能壞色力

(三) 死 山能壞壽命

(四) 衰 山能壞一切榮華富貴

(一)の『老山能く少壯を壞す』と云ふのは讀んで字の如く若い者が段々老人になることである。これは自然の順序であるが、此頃は老人が却つて若かへる者が澤山にある。老人が自分の娘のやうなものを妻にしたり。老婆がお白粉を塗つて大柄の着物を着るが如き風が見えるが、これは轉倒の甚しきものである。壯年は壯年らしくせねばならぬし老人はやはり老人らしくせんければならぬ。元氣ある青年が妙に考へ

老山能壞少壯

老山能壞少壯

七一

老人の跋

殺人刀活人劍

込んで、老人くさく引つ込み思案したり、老人が無闇に若返つて物見遊山に日を暮すと云ふことは宜しくない。全體我國は老人跋扈の國で少壯の遣り手も徒らに老人を利用するの外なき有様である。政治界に見ても樞密顧問官の定員二十六名中八十歳以上の老人が八人も居り、その最高權威たる山縣公や松方侯はやはり八十歳組に屬して居る。政黨に見るも矢張り尾崎氏とか、犬養氏とか、或は原氏だの岡崎氏だのと云ふ老人が跋扈してゐる。實業界を見てもやはり然りで、澤男だとか中野氏だとか、或は森村などと云ふ老人の世界である。教育界の方は此頃老人連の勇退説が大分八釜しいが、やはり教育家だけに早く此の方面の缺點について感じて居ることは幾分賞すべきもので

青年の進路を拓け

あらう。宗教界に於ても基督教では依然として海老名、小崎、植村氏等が代表者であり、佛教に於ては管長などと稱する人は皆八十組に屬し、生理的に煩惱を超越した人のみが多い。斯くの如きは餘り喜ぶべき傾向ではない。現代の青年は大に自覺して奮起せねばならぬ時代である。老人も亦たなるべく時機を見て勇退し、青年に進路を與へてやらねばならぬ。

一一 病山能壞色力

(二)の「病山は能く色力を壞す」此の病だけは仕方がない。是れだけは免れることが出来ぬ。然しこれも或る程度までは自分の心がけによ

病山能壞色力

殺人刀活人劍

七四

りて免れることが出来る。色とは體のことで、身體が病山に遭ふと山を抜く程の力も無くなつて仕舞ふ。大刀山のやうな力の強い相撲取りも病氣には勝つことが出来ず、遂に隠退せざるを得なくなつた。常陸山でも梅ヶ谷でも皆然りである。如何程遠大な理想を有し、また如何程立派なる學問を有する人であつても、身體が弱くして病氣になれば、理想も學理も應用することが出来なくなる。或人の歌に

織田が搗き豊公が捏ねし天下餅

骨も折らずに食ふは徳川

と云ふのがある。信長は四十九歳にして最期を遂げ、秀吉は六十三歳で命終し、家康は七十五歳で薨去された。三人の中で一番に長壽であ

『天下餅』

つたのは家康である。今の歌に『天下餅』と云ふのは日本六十餘州、當時三千餘萬石と云つた天下餅と云ふ日本の領土、群雄割據と云つて彼方には五萬石、此所には十萬石、鹿兒島には何萬石、加賀には幾萬石、仙臺には何萬石と云ふ風で日本の天下餅はまるで切れなく、これを搗いて搗いてつきまくりて、ヤット海内統一とて一丸の餅にしたのが信長である。それからソロ／＼味はんとして居る矢先、計らずも本能寺で不慮の最期を遂げられた。其の餅を相續したのが秀吉であつて、味つて見たらドウも加減が悪い、彼方にも堅りがあり、此所にも固りが有る、是れは畢竟捏ね方が不足であると云ふので、サア捏ねはじめた。捏ねて捏ねてコネあけて、いよく完全に海内が統一された。

病山能壞色力

七五

然るに其の子孫に至りてその餅が破れ始め、遂に持ちも擔ぎも成らぬ始末になつた。其の天下餅を三度目に手に入れたのが徳川家康である。此の天下餅で自らも十分に腹を満たし、更に之を子孫に傳へ、共に腹鼓を打つて天下泰平を謳歌せられた。それを詠んだのが前の歌である。徳川家康も天下餅を喫するまでは随分骨も折つては居るが、健康と長壽が大にその原因を爲してゐる。

一一一 死山能壞壽命

死山能壞壽命

(三)の『死山能く壽命を壞す』と云ふのは、壽とは七十、八十と生きるのが壽である。それを相續して行くのを命と云ふ。即ち死山は其の

無常迅速

壽命を壞つて仕舞ふのである。佛法には常在靈鷲山と云つて、法身的生命は決して滅するものではないと説くが、壽命が盡きて死することによつて肉身的生命は失くなつて仕舞ふのである。世の中はすべて生死事大無常迅速で、何時自分等が死ぬるかも知れぬ。

明日ありと思ふ心の仇櫻

夜半に嵐の吹かぬものは

である。平生の用意を怠つていよく死に瀕してから狼狽するのが常人の習はしであるが我等は此の生死岸頭に立つて遊戲自在の分がなければならぬ、支那に道吾禪師と云ふ人があつて、その弟子に漸源の仲興和尚と云ふ人が生死の問題に迷つた話がある。或日檀家に葬式があ

殺人刀活人劍

つて、師匠の道吾禪師が弟子の仲興を伴僧にして施主の家へ行つて見ると、例の如く死人を納めた棺桶が座敷の正面に据ゑてあつた。すると仲興和尚はイキナリ棺桶の蓋を取り、死人の頭を撫でて、師匠の道吾禪師に、

「生か死か」

と訊ねた。すると禪師は、

「生とも道はず死とも道はず」

と答へられた。仲興は、

『何として云はざるぞ』

と問ひ詰めると、禪師は依然として、

『言はず言はず』

の一點張りである。猶ほも重ねて問はうとする時、施主から時間が移ります。依つて、早く御引導を願ひたいと云ふ催促を受けたので、法に從つて式を終へ、御齋を振舞はれて歸寺の途中、又もや先刻の續きの問答を始めた。どうしても道吾禪師が、

『言はず言はず』

と逃げて居るので、氣の早い仲興は、

『何としてか言はず、若し言はずれば和尚を打ち去らむ』

と今には鐵拳が飛びさうな有様である。けれども相變らず平氣に道吾禪師は、

『打つことは打つに任す、言ふことは即ち云はず』
 と答へられた。斯うなると仲興赫と怒つて師匠の頭を打つこと數拳
 とあるから、五つや六つは無論ボカ／＼打擲つたものと見える。この
 時、普通の凡人であつたならば、必ず譴責し、嚴罰に處するのであら
 うが、サスガは道吾禪師である、ますます慈悲心を垂れ、何卒弟子に
 生死の大事を悟らせたものとの心から、
 『汝は未だ修行が足らぬに依つて、一層の精進が大切であるぞ』
 と懇に諭された上、放たれたと云ふことである。其後仲興和尚は一
 生懸命に修行して石霜禪師と云ふ高僧に參じて、前の生死問題を拈出
 して大に悟り得たと云ふことである。我れ／＼も徒らに四大假和合の

肉體に執着して、五欲六塵の奴隸となり、生死の問題を明かにするこ
 とが出来ぬやうでは、如何に社會國家の爲めに盡さうと思つても、完
 全なる働きは覺束ないことになるのである。

一三 衰山能壞一切榮華富貴

衰山能壞
一切榮華
富貴

(四)は『衰山は能く一切の榮華富貴を壞す』
 と云ふのであるが、即ち衰山は一切の榮華富貴を壞つて仕舞ふのであ
 る。油斷をして居ると何時かは知らぬが此の衰山に遭つて一切の榮華
 富貴を壞つてしまふのである。自分の心の中には我が我がと云ふ根性
 があつて、自分の思ふことは通したいと云ふ欲望を有するものである。

然し世の事はさう自分の思ふ通りには行くものではない。喜びたいと思へば悲しみが有り、樂みたいと思へば苦みがある、爲たいと思つても出来ないこともあれば、嫌だと思ふことでも爲ねばならぬこともある。欲望に限りはないが、叶ふことには限りがある。「法の苦惱を知らんと欲せば知足を觀ずべし、知足の法は即ち富貴安穩の處なり」とあるやうに、欲望を打破して樂しき生活を送るの要は唯足ることを知るの一句に歸するのである。増貫などと云ふ男も米の相場で大分懐を脹らかしたが、これで足ることを知つて慎めばよいのに、注意されても猶ほ不足の人であつたから遂にあのやうなる不名譽なことになるのである。昔、紀の國屋吉右衛門と云ふ人があつて、或る所へ奉公し

て居たが、生來綿密で且つ正直に働くところより、次第に主人の信用を得た。或る日主人は吉右衛門を呼んで、

「お前はなかなか見込がある。精を出して勉むれば後には立派なる商人になるであらう。それに就て先づお前の腕を試めすのであるが、此處に百兩の金がある。これをお前に渡すから、之れを資本にして千兩にして見よ」

と云つた。吉右衛門は早速承知して何んでもこれは何人にも必要な品を賣らねばならぬと京都に出かけて、西洞院紙（淺草紙のやうなもの）を仕入れて賣り出し、刻苦勉勵した結果、十年の間に到頭千兩の金にして主人に示すと、主人も大に喜び、然らば今度は此の金を資本にし

百兩を千兩に

殺人刀活人劍

八四

一萬兩を
十萬兩に

て一萬兩にして來いと命じた。吉右衛門は其金を持つて五年の間に一萬兩にした。主人は又其の一萬兩を渡して七萬兩にして見よと云ふ。吉右衛門は僅かの資本を十倍にするのは困難だが、すでに一萬兩と云ふ大金を資本とするのであるから、此度は三年経たぬ中に十萬兩にして持つて來た。主人はこれを見て、

『さうだ、これを資本にして百萬兩にして見よ』と云ふ。吉右衛門これを聞いて、我れ百兩の資本より十萬兩にするまでには千辛萬苦した。今之を百萬兩にすることは別段ムツかしいことではないが、かくては生涯を金に追ひ使はれなければならぬと考へ、徐ろに主人に云ふやう『貴殿はすでに幾千萬兩の金をお持ちになりながら、猶ほ此上に金を

一生命が第

殖さうとせらるゝ御心何とも心得がたい。金は二番で、生命は第一番である。少しは生命を大切にしたい生活になさつては如何で御座る』

と諫言したが、主人は欲望に追はれて足ることを知ると云ふ安樂な法を知らなかつたから、吉右衛門はかゝる主人に使はれて一生を苦みに終ることは人生の幸福でない、終に其の十萬兩の金を主人に渡し、自分には暇を乞うて大融寺と云ふ寺に入り、剃髪の身となり、圓智坊と號し一生を安樂に暮したと云ふ話が柳澤淇園の『雲萍雜誌』に載せられてある。

こりすまに打ちよせても岩が根に

衰山能壞一切榮華富貴

八五

おのれくだけでかへる仇浪

一四 軍機禪機の活作用

以上に述べた四山が二六時中相逼つて居る。是は何も昔の話でも何でもない、實に出る息、吸ふ息の如く逼つて居る、お茶を呑む時でも御飯を食する時でも此の四山は相逼つて居る、寢る時にも、起きる時にも四山相逼つて居る。この四山を透脱しなければならぬ、これを透脱すれば誠に安心である。年を取つても若い者と一向變らぬやうな人がある。あれは透脱して居る人である。随分六十、七十になつても若い者が敵はぬ人がある。あれは老山を透脱して居る人である、それか

病氣を離れて病氣をなす

ら病氣を離れて病氣をして居る人がある。病氣に罹つても病氣を離れて愉快に病氣をしてゐる。あれは病山を透脱した人である。それから死ぬることを何とも思はぬ人がある。滴水和尚と獨園和尚とは三十年一日の如く往來して居た、然るに獨園が病篤いと聞くと、早速滴水が見舞に行つた、獨園は蚊帳を垂れて竹陰の入室に横臥して居た。すると滴水は直ちに蚊帳の中に入り獨園の體上に跨り、面々相觸れんとして問うて曰く、

「病篤しと聞く、如何」

獨園曰く、

「然り」

軍機禪機の活作用

滴水また、

『到底治すべからざるか』

獨園答へて曰く、

『然り』

滴水則ち出で去つた。かくて獨園は化を垂れたのであつたが、これは死山を透脱して居るのである。それから衰山を透脱した人は、富貴に處しては富貴を行ひ、貧賤に處しては貧賤に行ふ人である。知足の法を知つて居るのであるから、少しも悲觀などをせぬ。さて此の四つの内について、一つくを透脱して居る人は澤山にあるけれども、此の四つが一時に自分に逼つて來た時には、少しばかりの修養では挫折す

七穿八穴
奪して旗を奪ふ

る。こよが吾人の陳べんとする眼目である。禪の言葉に、
『七穿八穴して鼓を攪き旗を奪ふ、百匝千重前を瞻後を顧る。虎頭に踞つて虎尾を收むるも未だ是れ作家にあらず、牛頭は没し馬頭は回る』

とある。七穿八穴して旗を奪ふ。彼の湊川の戦争の時に、忠臣楠公が弟正季と七離七遭して抜けつ潜りつ縦横に敵をなやまされしが如く戰場に於ては七穿八穴と云つて、攻勢を取つて敵中を抜けつ潜りつ縦横無盡に戦つて、遂に鼓を攪き旗を奪ふと敵の軍旗砲銃を悉く占領するに至るのであるが、さて相手方に在りては百匝千重前を瞻、後を顧るで砲臺を築き塹壕を掘り、鐵條網を張り逆茂木を設けて百匝千重の要

軍機禪機の活作用

殺人刀活人劍

害堅固の上に、四方八方に哨兵を派して蟻一疋も通さじと飽くまでも注意の上に注意をしてゐる。然してその戦闘の策略に至りては、虎頭虎尾一時に收むと云ふ底の方針であつて、敵をみなごろしにせずんば措かずと企て居るのであるが、これでも眞の軍機禪機の活作用を自在に拈弄するものと許すとは出来ない。よし只に虎頭に騎るのみにあらず、また虎尾を捉ふることを解す底の策略を有する人でも、いまだ眞の智略縦横の武人としては十分ではない。然して其の機会が牛頭は没し、馬頭は回る如く如何にも敏捷迅速であつて、撃石火の如く閃電光の如くであつても亦た未だ奇特とすることは出来ない。眞の武人たるものは、四山一時に逼るも、ビクともせず、眼光落時底に向つて幕進

四山を透
脱したる
人の境界

するものでなければならぬ。然らば四山一時に相逼るを透脱したるの眞面目は、如何なるものであらうか。其の透脱の處は何處であるかと云へば無寒暑の所である。無寒暑の處とは生死を透脱した人である。此處は恰も四山を透脱した當所である。不變易の處、萬里無寸草の處が四山を透脱して居るのである。然らば此の境を透脱した人の境界は如何と云ふに、外觀からは到底窺ふとの出来るものではない。斯る人に限つて或は朝から晩まで東も西も分らず、北も南も辨せず、線香の立つたのも知らず、號砲の鳴つたのも分からずにボンヤリして居るかも知れない。然し斯うして居ても、睡り坊である、間拔者である外から評することは出来ない。たとへば天空は如何に清澄であつ

ても、大海は如何に平穩であつても、何時黒雲雷電の天地をくつがへし、怒濤地軸を碎かん計があるかも知れぬ。古語にも、

「君子は一見愚なるが如く、英雄は小兒の如し」

とあつて、眞實四山を透脱した者は、一見白痴のやうに見えるけれども、此の大無心の人にして、初めて機にふれ時に應じて或る時は大千を覆へし、或る時は針端をも争ふ底の小心翼翼たる注意も出来る。其面つきは畫にかいた達磨の如く或はまた龍の如く虎の如くであつて如何に眼光炯々近よるべからざる概があつても、それが蚊を睨んで居ると云ふのでもなく、蜻蛉をねらつて居るのでもない。人が南を問へば北を答へ、北を問へば南を答へると云ふ風に木に竹を繼いだやう

に一向取り止めのつかないこともあるが、かゝる人の境界は到底普通の人情を以ては何とも角とも判断することが出来ない。

健全なる精神

一 信仰心の必要

健全なる精神は、信仰を基礎とせねばならぬ。信仰は實に健全なる精神の根柢を作るものである。元來、人間の力には限りあり、知識にせよ、技能にせよ、天地の大に比すれば漸く一微塵を極むるに過ぎずして、人力を以て何處まで進んで見たところが、宇宙の大を盡し天地

信仰は健全なる精神の根柢

の精に入ることが出来ない。縦ひ天地を呑盡吐盡するの大智慧を有する者ありとするも、退いて考案すれば、最も卑近なる自己の解決すら付くることが出来ぬ。斯く自己の生死、自己の運命、自己の未來、此等の事すら容易に解決を付くることの出来ぬのが人生の状態である。宇宙の大より見れば、人間の能力は洵に微弱なるもので、その微弱なる能力すら、猶ほ完全に遂行し得るものは少いのである。然るに僅かに一科の學を修め、一條の道理を認めたる程度にて、人生解すべしと言うて、安心を構へて居るが如きは、餘りに呑氣、寧ろ滑稽の極みであると思ふ。今日の世界を観るに、人文日に發達し、人智月に向上するにも拘らず、人心の奥底には依然として不健全の分子を抱き、それ

信仰心の
缺乏

が萬事實行の上に現れ、日々新聞紙の報道する如き世に淺ましき出來事のみ益々多くなつて來るのは、誠に痛嘆に堪へない、是れ全く西洋文明に心酔して、東洋固有の美風たる精神生活を没却したる結果で、法律以上に恐ろしいものはない、社會の制裁以上に憚るものは無いと云ふ、淺はかなる根性の致すところであらうと思ふ。一言にして之れを盡せば、信仰心の缺乏より生じたる陋態であらう。

二 信仰の基礎

諸君は信仰と云へば必ず珠數を掛けたり、念佛を唱へたりすること
を聯想するであらうが、信仰は吾人の耳目の及ばざる所に一の靈體を

健全なる精神

六

感得することである。然し人間世界の外に別に造物主があるとか、又は人間界の賞罰を司る神があるとか、又は其の神が勝手次第に天地を左右するものであるとか云ふ如き、不條理なものが信仰ではない。斯る考より湧き出でたる信仰は往々にして弊害を惹起するものである、抑も天地は曠漠なりと雖も遂には一源に歸し、宇宙は悠久なりと雖も一理貫通である。その一源とは何ぞや、一理とは何ぞや、仔細に觀察し來れば、宇宙間に森々羅列するもの、其のまよが一源頭の活波瀾、一實相の妙徳では無いか、此の一源は清淨にして得失是非の論量を絶して居る。此の一實は圓通無碍にして妙用自在である。若し之れを人格的に云へば、智慧と慈悲との體現である。人文の發達と云ふも、智

萬物一源に歸す

信仰の基礎

徳の向上と云ふも、悉く此の一源に接觸し、此の一實に隨順するの外には無いと思ふ。而して禪の悟道と云ふのは此の一源を證することに於て、佛陀の徳とは此の一實を應用するに外ならぬ。故に換言すれば佛陀とは、此の深體妙理の權化である。此の權化の尊體に向つて信仰歸依の念を捧げ、其の大慈悲を喜び、其の大智慧を崇め奉るのが真正なる信仰の基礎となるのである。

三 佛陀の光明

然し以上は且らく理論の上より見たる信仰にして、眞に吾人の生活の上に體現して活かして行くことは出来ない。眞實の信仰は理論の外

佛陀の光明

九七

になければならぬ。さればとて理論を無視するものでもない。理論の
 玄底を探りて人智の及ばざる所までを究盡し、其の堂奥に入りて初め
 て眞の信仰の光明を認めるのである。即ち信仰の心は、疑ひもなく
 佛陀の靈光を信じ仰ぐのである。人間の天地には晝夜の別はあるが佛
 陀の光明には晝夜の別はない。人間の生命には生死の隔てはあるが
 佛陀の壽命には生死はない。人間の行爲には表裏の別があるけれども
 佛陀の照鑒には表裏はない。佛陀は始終吾等を平等の眼を以て迎へ、
 吾等の迷情を救護する。佛陀の光明は不斷に吾人の心中に反射して
 止まぬ、斯く信仰すれば、吾人の胸中には得も言はれぬ感謝の念と敬
 虔の情とが發する。西行法師が嘗て伊勢の大廟に參拜された時に、一

かたじけなさに涙け
 こぼるる

夜を廟前に過せしに、夜深け人静まりて天地寂寥、神々しき靈境の夜
 景である、風に吟ずる松の聲は骨をも洗ふが如き心地せられ、雲間を
 出づる月影は心の奥までも輝くかと怪まれ、神の威靈のありがたさ身
 に沁み涉りて思はず、

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

の一首を詠せられたと云ふことは有名な話で、是れは正しく信念の發
 露にして、忝けなさに涙こぼるゝ時、既に心は神の御傍に往て居るの
 であらうと思ふ。是れ眞の信仰の發露にして、軍人精神の極致も、亦
 た此の信仰と一致するのである。

四 善行の源泉

幕末に於ける水戸の勤王家武田耕雲齋は、京都に至りて其の志を訴へんとし、元治元年の冬八百餘人を率ゐて出發したが、幕府の警備嚴重なる爲め、道を北陸に取り、途中幾多の艱難を経て越前まで漕ぎつけたが、雪の爲に阻まれ、同年十二月十日捕縛され、一行は盡く敦賀の牢獄に投ぜられた。大君に捧けまつらんとせし志も遂に之を訴ふるに由なく、翌年二月三日遂に、

さく梅の風に空しく散るとても

馨りは君が袖にうつらむ

二個の人

の歌を遺し、六十二歳を一期として空しく刑場の露と消え、一行の刑に遇ふもの三百五十二人に及んだ。斯る有様であつたので、勇氣勃たる壯年血氣の人々が未だ刑に處せられざる以前、獄中に在りながらも悲憤遣る方なき爲め、随分思ひ切つた事をして數々獄裏の官人達を苦めた。然るに一行中年猶ほ若き少年あり、敢て恐れ臆する色も無く、其の舉動の沈着にして其振舞の温順なる他に勝れて見えければ、獄吏も之を不思議に感じ、よく／＼氣を付けて見るに、彼の少年は袂の中より二個の人形を取出し、三度／＼の食事には必ず膳部の所に安じて丁寧に禮を施し、且つ朝起きたる時、夜寝る時には、必ず頭を下けて『お早う御座います』『お休み遊ばせ』と云つて敬ひ尊ぶこと、恰

眞の信仰

も生ける人に事ふる如くである。如何なる人形なるやと能々見れば、これは彼の少年の兩親の肖像であつた。彼の少年は兩親に死別せしや否やは知らざれども、孝心の深かりし爲め、兩親の姿を模造して之を懐中し、何れの土地に至るにも、兩親の傍に奉持するの心得を失はなかつたと見える。吾人をして云はしむれば是れが眞の信仰であると思ふ。此の信仰あるに依つて、肖像に事へること親在すが如くであつた。而して此の信仰は自から彼をして謹嚴ならしめ、温順ならしめたのである。吾人が世に處するにも復た斯の如くすれば、心の奥底より誠の光りが輝き、忠孝全備、信義完具の美果を收めることが出来る。故に眞の信仰は能く精神をして健全ならしめ、行爲をして善良ならしむるの源泉となるのである。

武道禪の極致

一 三昧の修練

三昧

禪機劍機の妙用を得るには三昧とならなければならぬ。三昧とは平易に云へばナリ切ると云ふ意味である。世間で能く讀書三昧とか念佛三昧とか言ふが、三昧を廣義に解釋すれば君臣の義も父子の親も朋友の信も夫婦の愛も此の三昧を離れて成立するものではない。三昧とは印度語にして翻譯すれば『正受』と云ふ意味になる。凡そ吾人が世の

武道禪の極致

中に處して物に觸れ事に接して其を取捌く上に於て、やよもすれば其の正鵠を失し、物を眞ッ正直に接受することが出来なくなる。若し一念發起して此の三昧に住する事が出来れば、在朝の有司が爲政の手腕を揮ふにも、在野の政客が立法の機關に參與するにも、若しくは教鞭を執つて育英の壇上に立つにも、決してその方針を誤ることがない。然し此の境界は思慮分別の力を以て得ることは出来ない。是れは命がけでなければならぬ。今日世間で云つて居るやうな生緩い修養などでは全體得られない。

二 劍道の極意

山内容堂公に仕へたる者に土方某と云ふ茶坊主があつた。身分は賤しいが性質頗る活氣に富み、容堂公も深く之を愛して士分に取立て、八十石の祿を賜はるに到つた。或る年のこと容堂公は參觀交代して江戸詰となり、土方某も随つて江戸に出た。或る夕方、土方は何處かで晩食をして、ホロ酔ひ機嫌で堀端を通り半藏門の前まで來ると、『少少お伺ひ致すが、貴公は土州の藩士では御座らぬか』と後から尋ねる武士があつた。その道の人から見れば、一見して刀の差しやう足の運び方、肩の怒らし具合、それで薩摩とか、土州とか、チャンと解つたものである。昔は武士が一目見ると、何藩と云ふことが解つたものである。そこで土方某も『お尋ねの通り拙者は土州藩である』と答へた。

劍道の極意

眞劍の立
合を申込
まる

武道禪の極致

二六

すると其の武士「是は忝なし、拙者は久留米藩の何某と稱する者に
て、諸國武者修行の者なるが、豫て土州藩には劍道の達人多しと聞く
幸にも貴殿に相見を得て此上なき幸福である、何卒眞劍にて御立合
を願ひたい」と申し込んだ。然るに元來が茶坊主の土方なれば、刀の
持様も知らぬ、況んや劍術などは尙更ら知らぬのに、眞劍を以て立合
へと云ふのであるから、自分に取つては生死岸頭に立つたやうなもの
で、忽ち死を決したのである。立合へば斬られるに相違ない、さりと
て逃れては君名に拘はる、これは死の外はないと決心した。此の刹那、
三昧に住することが出来たのである。こよが禪機とも劍機とも云
ひ得るに相違ない。斯く死は決したが、若し死に様が悪いと同じく主

千葉周作
を訪ふ

君の耻である、そこで對者に向ひ、「眞劍の立合は承知したが、我は
今日君命にて用途の歸途である、依つて御用の返事を君公に申上げね
ばならぬ。君命を報ずる間、貴殿は此處にお待ちを願ひたい、自分は
要事を果たし次第直ちに歸るであらう」と云ふ。對者の武士も「成程
君公の御用なれば止むを得ず、御用濟の上にて勝負下さるとは忝けな
し。然らば拙者は是にてお待ち申すべし」との事である。「さらば拙者
は是れより我君に御返事申上げん」と飛び去つて直に其足にて木挽町
の千葉周作の宅に赴いて玄關に取次を求めた。やがて取次が出て来て
「本日は主人大熱にて、誰人にも面會いたさぬ」と斷られた。そこで
土方は僞つて「今日面會したいと云ふのは拙者の要事ではない、即ち

劍道の極意

一七

君命である、お枕元でなりとも拜顔して君命を傳へたい」と云ふ。取次は止むなく主人に其の旨を取次ぐと、千葉も土州公の御言葉辭しがたく、「甚だ失禮ながら此處へ」と病室に通した。土方はイキナリ千葉に向ひ「君命と申したのは眞赤な虚である、拙者今晚途中に於て久留米藩の武士に逢ひ、しかじかの難題を申込まれ、死は決したるも苟も武士たるものが、死様が悪くては、矢張り君公の耻辱となる。依て其の死様を聞きに参つた」と云ふ。そこで千葉は「實際死を決したるか」とつくづく顔を見る。土方曰く「元來命は君に捧けてある、その命を惜いと思へば君を耻しめる、劍術は知らず、武士道は知らず、立合へば斬られる、また逃けても斬られる、故に自分は土州公の臣と

して君を耻かしむることになる、依つて死の外はない」時に千葉曰く「然らば死を決したりと云はゞ、武士の死に様を傳授せん、先づ第一に手拭にて後鉢巻をなす、是れ眉間に創を受けても血が眼に入らぬ爲め、其次に襷を絞ること、次に一刀をスラリと抜いて其鞘を其側に立掛けること、是は心氣を落ち附かせる爲めである、そこで抜くや否や七歩後に退つて、刀を眞向上段に振り翳し、ヤツと掛聲する、それと同時に目をつぶる、目をつぶると同時に無念無想になるのである。その内對者よりエヤツと掛聲が来る。其聲が右より來たならば、少し右へ向け、矢張りこちらにもエヤツと掛聲する、左から來たならば左へ向いてエヤツとやる。其内に體の内にヒヤツとする時がある、ソレは斬

相打の法

られたのである。それが左がヒヤツとしたら、左に向つて上段より切り込む、右の方だつたら右に向つて切込んで行く、さうすると自分は敵に斬られても、矢張り自分も敵を斬り得るので、これが相打ちである。如何に達人でも一方切込んで、反す刀で直ぐに受け止めると云ふことは出来ぬもので、今のやうにやると自分の疵は薄くして却つて先方の疵が重手になることがある。自分も斬られた以上は對手をも斬ると云ふのが、武士たるものゝ死にやうである。死を決したる以上は、斯ることは何んでもない』と教へた。土方は喜んで厚く禮を述べて、元の濠端に来て見ると、土手の柳が何かの木に腰を据付けて、對手は土方を待つて居た。『やアお待たせ申した、いざお立合ひを致さん』

と今教はつて来た通り、悠々として仕度に掛つた。愈々抜き放して鞘を立て掛け、やアツと掛聲と共に無念無想となつた。やゝ半時の後ち先方からエヤツと来た、少し右のやうだから、右に向つてエヤツとやつた、又半時も立つたと思ふ頃、ハツ／＼と云ふ息と共に、『參つた、先生お刀を納めて下され』と云つて、對手は大地に手を突き頭を下けて『實にお手の内恐縮しました、今日より何卒貴殿の弟子として下さるやう』と頼んだ。土方の方では却つて驚いた。自分は劍術も何も知らないのに、今吾輩を師匠と頼むなぞとは實に沙汰の限りだと思ふものだから、對手に向ひ白狀して『拙者は決して劍道などは知り申さぬ元吾輩は茶坊主であつたのを武士に取立てられ士分となつたに過ぎな

い、然し武士として貴殿に立會を斷ることも出来ず、死するのみと決心して、それから死ぬる方針を聞きに千葉の處に往つたら、云々なりと、前記の話をして、斯の如くの有様であるから弟子なんと云ふ譯のものでない』と云ふと對手は益々感心して、君の嘘のなき、知るを知るとし、識らざるを識らずとするは長者なり、是非に弟子にとの事にて、遂に止むなく宅に連れ戻つた。此後に至り、此事が土州公に聞え非常の御賞讃で、更に五十石の加増あり都合百三十石に昇つたと云ふ。彼の土方が敵に眞剣を望まれた時、死を決したのが、即ち禪の上から見れば三昧になつたものと云はれ得るので、心が三昧になつて居なければ必ず斬られたに相違ない。

三 人を斬らば須く血を見る可し

小なる自己の我見我慢をサツバリと投げ出して、大自己に一致しなければ、自由自在の妙を得ることが出来ぬ。故に三昧とは換言すれば、我れと宇宙と一枚になつた境界である。我れと宇宙と一枚になるから、爲すこと爲ることすべてが、天地の大道に合致し、自分から強ひて然うしようとなつてなくとも、自然と大道に契合して行くものである。其れには自己を忘れるやうにせなければならぬ。自己を轉じて大なる眞理に合致する、ここが徹底無我の境界、三昧王三昧の極致である。柳生但馬守と澤庵禪師との問答は何人も知る如く、柳生が或る時馬術の人を斬らば須く血を見る可し

自己を忘
れよ

試験をする爲めに、芝の愛宕山の坂を騎馬して登つた。然るに登る時は容易に乗り上げたが、さていよいよ下らんとした時に、何うしても無心になつて下ることが出来ぬ。心が動揺して不安を感じてならない。此の有様を澤庵禪師が遙かに覽られて「鞍上に人無く鞍下に馬無し」と喝破せられた。但馬は、此の一言下にハツと氣が付いた。所謂人馬一如の氣合を領得したのである。それで安心して坂を降つたと云ふ美譚がある。さすがに柳生但馬守と云はれる程の人も、三昧王三昧の境に安住することが出来なかつたが、澤庵禪師の一喝に依つて初めて人馬一如の境に住することが出来たのである。此の境地は如何なる人にも必要なことであつて、文學美術宗教等に從事して、自己を忘れると

人馬一如

攝津大掾

五郎正宗

云ふは、全く此の小自己を忘却して絶対無限の大自然を得るので、眞の文學者が死に瀕して猶ほ著述に従事し、眞の宗教家が火中に入れられて、猶ほ泰然たるが如き、眞の美術家が世を忘れて彫刻運筆に餘念なき等は、悉く此れ三昧に安住することを得たからである。彼の攝津大掾は舞臺に出演するに先ちて、瞑目靜坐して廣助に三味線を弾かせ、口の中に義太夫を語つて充分の準備してから出演するので、劇中の人物が活躍して聴衆を魅する程巧みであつた。又五郎正宗は刀劍を鑄る時、全身の魂と力とを込め、其の一劍を鍛へ上げる時は後ろに倒れる程であつたと云ふ。是等は悉く三昧に安住して、眞の忘我の境に入つたものと云はねばならぬ。古語にも「人を斬らば須く血を見る人を斬らば須く血を見る可し

べし』とあるやうに、苟も禪に志したならば、此の境地に達するまでも不退の修養を積み、大丈夫の本領を發揮せなければなるまい。

日本魂と禪

一 日本歴史と武士

日本歴史の中から武士の名と佛教の高僧とを除けば、蟬の脱殻のやうになつて、何等の價値も存しないであらう。日本の歴史の中で、武士の勢力は實に大なるものがある。(佛教の高僧のことは且らく措く)昔から日本の國威を主として發揚したものは皆武士であつた。若し日

武士の精神生活

本の人物史と名くるものでも作つたならば、恐らくその人物の大半は武士を以て占領されるであらう。然らば是等の武士は、平生如何なる信仰を有して居つたか、即ち武士は如何なる精神生活を送つたか、これは吾人として是非知らねばならぬ問題である。

歴史は事實である。特に吾人の現在生活なるものを、過去に遡つて展開して行つたものが歴史でなければならぬ。故に單に歴史を以て記述的のものに見たり、形式的のものを見てはならぬ、我等の現在生活と交渉せしめ、思想的に遡つて、歴史中の人物と今日の吾人との精神とに共通を感じるやうにする、こゝに初めて歴史は現代に生きて來る。而して今日の吾人の生活が、歴史に記されたる人々の反映である

やうに思はれて来る。此處に歴史の價値があるのである。自分とのつ
びきならぬ關係が結ばれて來るところに活ける歴史が現成する。

二 歴史の正しい見方

されば歴史を單に事實の歴史として見たのみでは、歴史としては意
味がない。何年何月何某が何處に於て死んだと云ふやうな、表面に現
はれただけの事實、それが歴史の全體であると思つては、眞に歴史を
見る人と云ふことが出来ない。歴史には事實の歴史の外に、其の歴史
全體に流れて居る思想がある。吾人の祖先の血潮の中には如何なる思
想が流れて居つたか、その思想を現在の自己の思想の中に取り入れて、

歴史の裏
面を流る
る思想

現代の實人生に接觸せしめる、此處に初めて歴史の意味がある。そこ
で自分は日本の事實史の上で、最も華やかかなりし武士の行爲の裏面に、
如何なる思想が働いて居つたかを述べて見たいと思ふ。

三 鎌倉武士の佛教

昔の武士は如何なる思想を持つて居つたか、即ち如何にして精神修
養して居つたかと云ふに、歴史上の事實に依れば昔の武士は皆それぞ
れ精神修養の爲めに師範を持つて居た。その師範は何物であるかと云
ふに、皆佛教の僧侶であつた。佛教と云つても、眞宗や日蓮や浄土等
いろ／＼あるが、主に禪宗の僧侶であつて、即ち武士は皆佛教、殊に

武士の修
養

禪宗を信仰して安心立命して居たのである。それに就いて實例をあけて見れば、源頼朝は毎朝必ず佛前に向つて讀經した。若し用事があつて止むを得ない場合には、代理を立てて讀經せしめた。自己の師範役としては宋の佛光禪師を招いて鎌倉の圓覺寺に住せしめ、朝夕坐禪して居た。其時の請待状とも云ふべきものが現在も圓覺寺に傳はつて居る。北條時宗は佛光禪師に附いて精神を訓練し、時宗の人格の一面をなしたことは屢々述べたところである、又楠正成も佛教を信仰した。即ち北條征伐の時、法華經八卷を書寫して八幡宮に奉納し、戰勝を祈禱した。これらは有名な逸話として傳へらるゝ處である。

四 死生に關する觀念

歴史を通じて日本武士の精神思想を研究して見れば、

- (一) 死生に關する觀念
- (二) 怨親に關する觀念

以上の二太觀念の活動して居ることが解る。第一の死生に關する觀念とは、一言にして云へば、死と云ふことであつて、山櫻は日本武士道のシンボルであるやうに、散り際が潔いことを以て誇りとして居るが、日本武士は如何に命がいらぬからと云つて、決して生命を弊履の如く捨てたものではない。即ち死ぬべき時を考へて死んで居るのであ

る。即ち死に關して一大安心を有して居たものである。故に武士が最期に残した辭世の歌や詩が多く残つて居るが、その詩歌の中から彼等の死生に關する觀念を認めることが出来る。左に少しく例を擧げて見よう。

天正十八年に豊臣秀吉が小田原城を攻めて北條氏政、同じく氏照等を苦めた。此の時の戦争には秀吉は持久策を執つてズリくくと攻め立てた、それには當時諸將の家族を呼寄せたのを以ても分る。最後に秀吉は使者を城内に遣はして、氏政氏照等に切腹降参の勸告をなさしめた。然るに秀吉の使者が城内に這入つて見ると、北條氏の一族郎黨が皆籠城に苦しんで居る。苦しんで居るが、城の備へが整然として少

北條氏政

しも取り亂した有様がない。靜肅であつて些かの狼狽も無い。使者もさすがに氣の毒になつて其の使命を傳へるに躊躇して居ると、其時城主氏政の方から、

『お使者の仰は氏政確かに承知した、定めし氏政に切腹せよとの命令で御座らう』

と口を切つた。仰せの通り如何にも左様であると使者が云つた。氏政はもとより覺悟のところ、

『暫く待たれよ』

と沐浴した後、一族の者皆列坐して自害したのである。氏政は悠然として死に就いたが、その時の歌に曰く、

死生に關する觀念

空より來
り空へ歸
る

日本魂と禪

我身今消ゆとやいかに思ふべき

空より來り空へ歸れば

此の歌の意味は、なにも命は消えて失くなると云ふものではない。佛
教の大乗の上から見れば、我が生命は小さな自己のものではない、大
なる宇宙の大精神の支配するところのものである。故に自分の命にし
て自分の命ではない。自己を此の法身界の大精神に任せようと云ふ意
味である。此の氏政は小田原の早雲寺の明叟和尚について參禪して居
たが、氏政の死を聞いて和尚も斷食して死んだ仕舞つた。

五 藤原資朝の辭世

藤原資朝

藤原資朝は武運拙なくして北條氏の爲めに捕へられ、佐渡に流され、
元徳二年同島で斬られたが、その時の状況を太平記は斯う傳へて居る。
五月二十九日の暮程に資朝卿を駕より出し奉りて、遙に御湯を召
されたまはぬに、御行水給へと申せば、早斬らるべき時なりけりと
思ひ給ひて云々。人間の事に於ては頭燃を拂ふが如くになりぬと覺
られ、只綿密の工夫の外は餘念ありとも見え給はず。夜に入れば輿
さし寄せ乗せ奉り、爰より十町ばかりある河原へ出し奉り輿も
昇き据ゑたれば、少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直りて
辭世の偈を書き給ふ、

五蘊假成レ形、四大今歸レ空、

藤原資朝の辭世

將^テ首^ヲ當^ニ白^ク刃^ニ、截斷一陣風、

斯^カくて從^シ容^シ死^シに就^ツいたとある。北條末葉の京都公卿にして此の如く生死交謝の時に當つて言動の壯烈なるものがある。これも禪勃興の賜であらう。

六 大内義隆の臨終

大内義隆は、勤王の志である。後柏原天皇の即位せらるるや、功によりて太宰大貳兼兵部二位として昇殿を許された。文武兩道を兼ね、兼て龍福寺の玉堂和尚に參じて生死不二の眞境に悟入した。一族武運拙くして遂に生害せねばならなくなつた、その時の辭世に、

大内義隆

討つ人も討たる人ももろともに

如露亦如電、應作如是觀

此の末句は金剛經の偈文であるが、此の境界を詠むまでには、容易な修養では出来ない。

七 明智光秀の偈

明智光秀

明智光秀はやはり禪を修した。主殺しの罪人ではあつたが、その精神生活は確かに禪の修養から來てゐる。即ち山崎にて秀吉と戦ひ、武運拙くして敗北した、その臨終の一絶に曰く、

順逆不二門、大道徹三心源、

明智光秀の偈

五十五年夢、覺來歸二元

と。順逆不二門とはよく彼の心事を語り得て妙なりである。然し此の大丈夫の觀念は、現今の禪僧などが脚下にも及ぶところではない、さすがに彼も一個の英雄たるを失はぬ。

八 怨親に關す觀念

以上は漸く一例に過ぎぬが、歴代の英雄豪傑の死際の立派であつたことは、此等の死生觀によりて略ぼ了知することが出来ようと思ふ。此の觀念は何によつて養はれたかと云ふに、即ち佛教に依つたもので佛教の中に於ても殊に禪宗に關係が深かつた。即ち鎌倉以後の武士は

概ね禪宗に依つて精神思想の修養を積んで居る。

第二は怨親に關する觀念であるが、これも日本武士の特色と見るべきものがある。即ち一度戦ひを交へたならば、勝敗を決すると云ふ場合には、どこまでも敵將を討取らなければ止まぬと云ふ強い精神で、若し勝敗を決して仕舞へば、怨親の情は全く無くなり、決してこれを怨まず、むしろ憐んでやると云ふので、是れが所謂武士の情けとでも稱すべきものであらう。

武士の情

源頼朝は平氏を討ち亡ぼして天下を取つたがいよく戦勝した後には平氏の亡霊を弔つて居る。又足利時代に於て、禪秀の亂といふものがあつた。之は上杉氏實が足利持氏と戦つた戦争である。此時持氏

欠

高野山の 供養塔

日本魂と禪

二三

は、敵の戦死者を弔つてのみならず、敵の斃れた馬までも弔つて居るのである。時宗が蒙古の軍勢を挫いた時、蒙古の戦死者の爲に地藏菩薩を供養して追弔してゐるのも有名である。文祿の役、即ち豊臣秀吉が朝鮮を征伐した時に、朝鮮兵の戦死者を追弔し、高野山に供養塔を建てた。此の供養塔が測らずも明治初年、我國が萬國赤十字社に加盟する時に用立つたことも一の奇蹟であらう。それは日本が初めて萬國赤十字社に加盟を申込んだ際、外國人は日本人に博愛の精神といふものがあるか否かを疑つた。博愛の精神は文明人にのみ限られてゐるのであるから、日本人には無いであらうと思つた。そこで日本ではその精神をあらはすものを求めたが、誰れが知つたものか、此の高野山の

欠

時宗曰く、

『某元來怯懦を忌むこと甚し、何としてか時宗より來ると云ふや』
禪師曰く、

『試みに明日より時宗を棄却し來れ』

斯くて祖元禪師は時宗に五箇條の垂示を與へた。其の垂示に曰く、

五箇條の垂示

第一、外界の事物に對して全然無頓着なること。外界の事物に對して苟も心を馳せ神飛ぶが如きは、それ最も人の氣質をして戰々競々たらしむるものなり。此點に於て金剛座上に於ける釋迦の如く、獅子王の歩行するが如くなるべし、常に精神も磐石の如く持ち、世界は只我の外に偉らきものなしと思ふべし。然れども決して他人を輕侮し

北條時宗の心膽

古武士の禪機

又は他人に無禮を敢てすべからず。常に精神坦然として而かも恭敬を忘るべからず。

第二、精神も常に澄水の如く保つべし、精神動揺して外界の事物に頓着すれば、必ず其他を忘却すべし。突然の怖畏は此間より生ず、一方に注意すること深ければ、一方の油断も愈々深きなり、努めて平如として精神を臍下丹田に置くべし。

第三、才略智謀に恃む所あるべからず、恐懼病は才略智謀の設計を現出するの原動力なればなり。其の機に當り、變に應じて此心を失はずんば、必ず靈妙なる當意即妙の作略智計を生ずべし。宜しく平常の時と非常の時と其の心を一にすべし。

第四、勇猛の士氣は白刃を踏むべし、柔弱の肢體は窓隙の風をも忍ぶ能はず、宜しく常に勇猛の士氣を保持すべし。

第五、見る所狭小なる時は、其の眼光見識狭小にして、膽量亦自ら狭小なり、須らく常に注意して其の心量を擴大にすべし。

祖元禪師の鉗鍵に依つて時宗の怯懦の性は次第に退治せられ、遂に大膽不敵、人の心膽を寒からしむるの大英雄となつたのである。當時元と我國との國交愈々迫り、大敵今にも押し寄するにあらずやと人心恟々として堵に安んずるものとなない。畏れ多くも龜山法皇は伊勢の大廟に御祈願された程である。此時天下を一肩に擔つて立たざるを得ないのは北條時宗である。乃ち時宗は國體を擁護し、皇室の尊嚴を保

古武士の禪機

持する爲めに、元の無禮を責めて使を追ひ還し、或は刺殺して大決心の臍を堅めた。頃は弘安四年の春、時宗親しく祖元禪師に調するに、禪師は彼れの來意を悟り、『莫煩惱』の三字を書して示した。時宗問うて曰く、

『如何なるか是れ莫煩惱』

禪師曰く、

『春夏の間博多の邊騷擾せん、一風纒に起りて萬艦掃蕩せん、願くは慮とする勿れ』

實に時宗に對する慈悲徹惻である。大事に臨んでも決して動する勿れとの大鐵案を下されたものと見ねばならぬ。愈々元の大軍は博多に

莫煩惱

襲來した。上下の人心動搖して、悉く色を失して狼狽したが、時宗は神色自若たるものである。やがて時宗武装して禪師に調して曰く、

『大事到來す』

禪師曰く、

『如何か向前せむ』

時宗身を躍らして大喝一聲す、禪師曰く、

『眞の獅子兒なり、能く獅子吼す、慕直に前進して回顧するなかれ』

時宗は拜辭し去つたが、英雄の方寸すでに定まり、金剛不動の大精神はすでに眼中十四萬の元兵なく、大元四百餘州を吞却して居たのである。頼山陽此間の消息を歌つて曰く、

金剛不動の大精神

北條時宗の心膽

古武士の禪機

筑海颯風連^レ天黑、 蔽^レ海而來者何賊、
 蒙古來、來自^レ北、 東西次第期^二吞食^一、
 嚇得趙家老寡婦、 持^レ此來擬男兒國、
 相模太郎膽如甕、 防海得士人各力、
 蒙古來、吾不怖、 吾怖關東令如山、
 直前斫^レ賊不^レ許^レ顧、 倒^二吾櫓^一登^二虜艦^一、
 擒^二虜將^一吾軍喊、 可^レ恨東風一驅附^二大濤^一、
 不^レ使^二羶血盡膏^一日本刀。

四 楠正成の生死透脱

正成と明極

楠正成が攝津廣嚴寺の明極楚俊禪師に參じて生死の關門を透脱した
 ことも有名である。尤も三上參次博士などは正成の參禪説を盛に否定
 して居るが、今は古來傳へられて居るまゝを述べて見る。「明極行狀」
 に依れば、
 建武三年丙子年、攝河泉三州の太守橘姓正成、綸命を奉じ、五月
 十二日帝城を發し、湊川に到着し、軍旅を當山（醫王山）の麓に屯
 し、一日禪師楚俊（明極）に問うて曰く、

『生死交謝の時如何』

師曰く、

『兩頭俱に截斷して一劍天に倚つて寒し』

楠正成の生死透脱

正成曰く、

『落處作麼生』

師震威して一喝す、正成起立して三拜し、通身汗流る。師曰く、

『爾徹せり』

正成曰く、

『若し來りて和尚に見えずんば、安んぞ向上の關捩を超出するを得ん、今より代々針芥を失はず』

師曰く、

『爾の問酬舊參に下らず、平居却つて幾箇の宗匠を見來るか』

と、正成答へて曰く、

『某甲、少より誠を禪門に傾け、願を宗乘に探り、一日南都に赴く、路片岡を經一禪者に逢ひ頗る疑ふ所を質す、某甲却進して問うて曰く「猶密旨ありやなしや」僧の曰く「公の名如何」某甲答へて曰く「楠多門兵衛正成」と、僧「正成」と呼ぶ、某甲應諾す、僧の曰く「這裏是れ什麼の所在なる」と、某甲是に於て心中豁然として省悟し、是れより後常に此の僧に請ひ數々慈誨を蒙り、或時某甲問うて曰く「道を以て軍に勝つ如何」と、僧の曰く「至善を兵となす」と、某甲道を十三歳、一れず、この僧故里に歸り幾ならずして入寂す。某甲二位左近衛中將ハヶ月餘、たゞ勝縁淺薄なることを恨む、然りと雖も英魂は今尙ほこより以來、兵を用ふる自在、機に對する無碍なり』

楠正成の生死透略

正成曰く、

『落處作麼生』

師震威して一喝す、正成起立して三拜し、通身汗流る。師曰く、

『爾徹せり』

正成曰く、

『若し來りて和尚に見えずんば、安んぞ向上の關捩を超出するを得ん、
今より代々針芥を失はず』

師曰く、

『爾の問酬舊參に下らず、平居却つて幾箇の宗匠を見來るか』

と、正成答へて曰く、

至善を兵
とす

「某甲、少より誠を禪門に傾け、願を宗乘に探り、一日南都に赴く、
路片岡を經一禪者に逢ひ頗る疑ふ所を質す、某甲却進して問うて曰
く「猶密旨ありやなしや」僧の曰く「公の名如何」某甲答へて曰く
「楠多門兵衛正成」と、僧「正成」と呼ぶ、某甲應諾す、僧の曰く「這
裏是れ什麼の所在なる」と、某甲是に於て心中豁然として省悟し、
是れより後常に此の僧に請ひ數々慈誨を蒙り、或時某甲問うて曰く
「道を以て軍に勝つ如何」と、僧の曰く「至善を兵となす」と、某甲
れず、この僧故里に歸り幾ならずして入寂す。某甲
ハケ月餘、たゞ勝緣淺薄なることを恨む、然りと雖
もより以來、兵を用ふる自在、機に對する無碍なり」

と、師しす

「善よ

氷の爐ろ鞆たもとに入いらずんば、焉いづくんぞ今日こんにちの事ことあらむ』

と、斯か

瑠璃るり殿でん内ないに入りて醫い王わう尊そんを拜はいし、香かう火わ縁えんを結むすびて去さ

る。師しこれを門かど送おくりせり。

さて楠公なんこうは禪師ぜんじと別わかれて明日あすとなると、敵兵てきへい五十萬まんと正成まさしげ僅わずかか七百互たがひに鋒ほこを交まじへ、楠公なんこうは前後ぜんごに敵てきを受け挾はさ打ちとなつた。そこで楠正くすのまさき成公しげこうは弟おとうと正季まさきよと相談さうだんし、決戦けつせん十有六回じゅうくわいつひ遂つひに七十三騎しちじゅうさんきを残のこしたのみである。實じつに當時たうじの悲惨ひさん思おもひやられる。正成まさしげは今いまは是迄こゝまでなりと湊川みなとがは北きたの民舍みんしゃに入り鎧よろひを釋はなき互たがひに自殺じこくすとある。これは太平記たいへいきに據よつたものであるが、明極めいごく行狀ぎやうじやう及び護法ごほふ賢聖けんせい傳でんには廣嚴寺くわうげんじの無爲庵むゐあんに引上ひきあげたと

云いつてある。正成まさしげ弟おとうとに告つげて云いふに、

「愈々いよいよ生死しやうじ交謝かうしやの時ときが來きたが、死しして何なにをかなす』

と、弟おとうと曰いはく、

「七度たひに人間じんげんに生うまれて國賊こくぞくを亡ほろさん』

と云いふ。正成まさしげ之これを聞きき欣然きんぜんとして、

「汝なんぢ吾わがが心こころを得えたり』

と云いはれ、互たがひに刺さちがへて死しんだのである、共ともに死しするもの七十二人にん

正成まさしげ四十三歳さい、これ建武三年けんぶねん五月ごがつ二十有日にじゅういちにちであつた。天皇追悼てんわうたうたうし玉たまひ

正三位左近衛中將せいさんざいしんちゆうしやうを贈おたる。今日別格官幣社こんにちべつかくわんぺいしやとして祀まつられてあつて、

其そのの英魂えいこんは今尚いまなほ存ぞんし、吾人ごじんの國民的こくみんてき大精神だいせいしんに感化かんくわを與あたへて居ゐる。實じつ

に正成は安心せる英雄である。今日の人でも此の精神を以て事をなさば、必ず今楠公となることが出来る。

五 太田道灌のへんなし袋

太田道灌

太田道灌は曹洞臨濟二宗の禪匠に参じてその禪機を鍊つた。殊に下總龍穩寺泰雙妙康和尚に歸依し、しばしその三十棒を喫して居る。又城南に萬年山青松寺を建立し、雲岡舜徳禪師を請じて開山第一祖とした。道灌一日雲岡舜徳禪師に参じた時に、禪師が道灌をして、「瑞巖主人公の話」を看取せしめられた。此の公案は瑞巖和尚が毎日自分で自問自答するに曰く、「主人公が居るか」「ウン、居る」「眠つて居る

か起きて居るか」「起きてしつかりして居る」「さうか、それなら大丈夫何人にも瞞着されぬやうにやつて呉れ、頼むぞ」「ウンよし」と云つたやうなものである。然し是れは一應文字上の講釋に止り、實地に自分自分が自分を疑はぬ大丈夫に達するには容易でない。それには瑞巖と自分と一枚にならねばならぬ、今道灌も此の公案を工夫したが容易に了悟することが出来ない。この話を参究すること二年に及んだが、中々以つて入頭の邊量にも及ばなかつたのである。一日越生に遊びて、途中にて一人の客の大悲の靈跡を巡拜するの逢つた。旅は道づれ世はなさけとやらで、二人は互につれづれの話をしながら歩いて居たが、道灌曰く、

太田道灌のへんなし袋

「何れの處の人ぞ」

客曰く、

「京師なり」

道灌曰く、

「彼の中の山川此間と孰れぞや」

客曰く、

「唯だ鐘聲のみありて異なることなし」

と、道灌是に於て忽然として省悟した。直ちに歸りて雲岡和尚に謁し
所解を呈するに、和尚曰く、

「即今主人公那裏にかある」

山は月樓
ふの鐘に答

と、道灌曰く

「山は月樓の鐘に答ふ」

和尚思はず呵々大笑して、

「汝漸く徹せり」

と云つて印可を與へた。斯くして道灌は瑞巖主人公の話の實究により
て、漆桶を打破し、生也全機現死也全機現の大安樂の境界に達するこ
とが出来た。然るに高木は風に吹かれ易きの諺に漏れず、遂に主人
上杉定正の疑ふ所となり、粕屋の第に招かれ、浴室に入つたところを
刺客藏人の爲めに殺された。然し此の生死岸頭に立つたけれども道灌
は少しも騒がず、神色自若として右手に槍幹を抑へて辭世の歌を詠ん

太田道灌のへんなし袋

だ、即ち

昨日までまく妄執を入れおきし

へんなし袋今やぶれけん

と。また或る書には左の如く詠んだとある。

かかるときさこそ命の惜しからめ

かねてなき身と思ひ知らずば

『兜率の三關』に曰く、自性を識得すれば方に生死を脱す、眼光落時作麼生か脱せむと、道灌の最期、また此の概がある。

六 宮本武藏の參禪

宮本武藏

宮本武藏と云へば三歳の童子も知らぬものない、二刀流の達人である。此の人は熊本に行つてから參禪した、大勝寺と云ふ寺は細川家の寺であるが、臨濟宗に屬してゐる。この寺の住職に春山和尚と云ふ氣鋒の鋭い禪僧について武藏は參禪したのである。それから彼の劍法ばかりでなく、繪畫とか書とか云ふものにも餘程禪味が含まれて來た。殊に書畫の如きは春水和尚に參じてから、發展したやうな形跡が見えてゐる、武藏の畫と云ふのは頗る珍らしいもので、彫刻なども寫眞に取つたのを見ると、不動の木彫刻であつたが、實に活潑々地な不動である。その外武藏には彫刻あり、繪畫あり、それから色々の細工物、たとへば鞍だとか、柄の如き木劍の如きものもあるが、悉く禪味を帶

びざるはない。殊に其の書の如き『寒流月を帯んで澄みて鏡の如し』などは頗る禪機を帯んだものである。

七 塚原卜傳の無手勝流

塚原卜傳

塚原卜傳が無手勝流の活機は、やはり禪を學んでゐる。卜傳阪東阪西を歴遊して將に東に歸らんとするに當つて、大津の坂本に至り、舟を以て琵琶湖を渡つた時、舟の中に年の頃三七八、容貌魁偉の一人の武士が居た。ところが彼は鼻高々と劍法の自慢をなし、吾れ多年劍法を究め、人をして咫尺に立たしめずなどと大言壯語するを聞き、初めは聞えぬ振を装うて居た卜傳も、あまり聞きづらく思つたか、口を

無手勝流

開いて我も亦幼少の時から好んで劍道を學び其の奥底を極めてゐる。然し自分は人に勝つことを欲しないが、また負けることも好まないと阿々大笑した。武士は些かムツとして、『貴公は然う云はれるけれども、それでは如何なる劍法を學ばれたるか』と問ふ、卜傳答へて曰く、『我が流は無手勝流である、敢て他から勝たうとはしないが、亦た負けようとも欲しない』と答へた。武士曰く、『然らば腰間に帶ぶる二刀は何の用をか爲す』

ト傳從容として答へて曰く、

『此の刀は以心傳心の銘刀、煩惱の悪魔を截斷し、内心の賊を退散せしむるものである』

武士曰く、

『然らば汝は能く無手にして相對し勝つことを得るや否や』

ト傳曰く、

『我が劍は能く活人劍ともなり、殺人刀ともなり、人に對して自得自在なり』

と。武士曰く、

『然らば汝能く我れと戦ふや』

ト傳曰く、

『戦ふべし、然れども此處は船中なり、船中に於て戦はば定めて船客に迷惑を及ぼすことならん、乞ふ、唐崎の離れ島にて大に雌雄を決せむ』

と。武士兩腕をからけ、やがて離島に達するやヒラリと身を躍らして島に登り、一刀を抜いて身がまへし、今にも戦はんとする氣勢である。斯くと見るよりト傳は靜かに棹を取り、

『我れ心性を臍下に修めずんば起つべからず』

とて、件の棹を以て崖を一突きし、船を開いて島を離れた。武士は大に氣をいらだて、

『卑怯なり、卑怯なり』

と呼ぶ、卜傳は大に笑ひ、扇を開いて、

『是れ即ち無手勝流なり、戦はんと思はど此處までお出で』

と云つて船を進めて此處を去つた。此の如きは實に賊馬を借つて賊を追ふの活機略を具へたものと云つて宜しい。心を明鏡止水の如くすれば、如何に劔刀上を走ると雖も大不動着である。

大不動着

八 藤原藤房と關山

後醍醐天皇は英邁の御氣象を以て王政を復古せしめ給ひしも、時運到らずして再び敗れ、萬乗の大君も笠置の山に落ちさせ給うた。従ひ

藤房の遁世

奉つたものは、藤房、季房の兄弟のみであつたが、その後天皇は笠置の山を通れ辛苦を嘗めつゝある内、遂に天皇は隱岐に流され、藤房卿も常陸に流さるゝに至つた。後に至りて高時誅に伏して再び王政復古し、朝廷に論功行賞があつた、それが亦た頗る不公平なものであつたので、藤房はしばしば諫言したけれども主上にはお用ひがなかつた。三度に及ぶも御聽許がないので、藤房は世の無常を嘆じ、飄然として去つて妙心寺の關山國師の門に投じた。然るに關山國師は藤房卿に『本有圓成』の公案を授けられた。藤房工夫辨道すること多年に及び、一日豁然として大悟し、所解を關山國師に呈した、その偈に曰く、
是心一了曾不先、利三益人天盡未來、

佛祖深恩難報謝、何居馬腹與驢胎。

關山莞爾として問うて曰く、

『是の心何處にかある』

藤房曰く、

『虚空に逼塞す』

關山曰く、

『未審し、何を以てか人天を利益せむ』

藤房曰く、

『行きては到る水の窮る所、坐しては見る雲の起る時』

關山曰く、

『佛祖の深恩如何んか報ぜむ』

藤房曰く、

『頭に天を戴き、脚に地を踏む』

關山曰く、

『馬腹驢胎、何としてか入らざる』

時に藤房は黙して禮拜した。關山呵々大笑して曰く、

『汝今日大徹大悟せり』

藤房卿は斯くの如くして悟道されたのである。其の後身を行雲流水に托して、青山是れ我家の見地に立ちて雲水悠々の生活を送つて居られたが、關山國師が入寂せらるゝや、妙心寺の請に應じて第二世となり

授翁宗弼と號して、明治天皇より圓鑑國師と諡せられた。然し是れには大分歴史家の異説があつて、いづれと定めることが出来ないが、藤房卿が都を去りて越前鷹の巢山と云ふに一時は隠れられ、それから片笠負笈の旅装で山地海邊の難路を経て加賀、能登、越中、越後と逍遙せらるゝ内、越後國蒲原郡持倉正縁寺に住山する月泉良印禪師の道譽を聞きし召し、その爐鞴に投ずることになつた。然るに月泉禪師は後醍醐天皇の曾て御歸依深かりし、曹洞宗總持寺開山常濟大師の法孫であつたので、藤房卿は其の勝縁に感じ、師弟の禮を執られた、斯くて法諱を良雄無等と號し、師と共に秋田に來り、補陀寺第二世を繼いだ。其の祝國上堂の法語に曰く、

三徳六味佛に供し祖に供す、有情非情均しく利樂に沾ふ、還て恩を知り恩を報ずる者ありや、噫、美食飽人の喫に中らず（原文漢文）
 其後四年を経て正平十七年十月十日六十七歳を一期として示寂せられた。それで秋田の補陀寺には卿の墳墓や或は當時所持せられたと云ふものが澤山残つて居ると云ふ。妙心寺の説と云ひ補陀寺の説と云ひ、その何れが正しいか自分には解らぬが、何れにしても出家して禪に參じたことは明かである。

九 蜷川新左衛門と一休

蜷川新左衛門

蜷川新左衛門は親當と稱し、足利義教將軍に仕へたる武士である。

蜷川新左衛門と一休

火葬場に
女

古武士の禪機

政府の公役を勤め、右衛門の少尉に任ぜられた。文武兩道に達し、殊に和歌の妙を極め、集外歌仙と稱さるゝ一人である。新左衛門が一休禪師に参ぜられたことは有名な物語であるが、参禪の動機は或る夜新左衛門が烏邊野を過ぐると、丁度草木も眠る十二時頃であつたが、女人が火葬場に死人を焼く火の前に端然として坐つて居た。さすがの新左衛門も薄氣味悪く感じ、或は魔性ではないかとの疑念から、

『そちは何故かよる所に一人にて居るぞ』
と叱つた。彼の女ニツコと笑み、

夏蟬のもぬけはてたる身となれば

何かのこりてものおちをせん

新左衛門いよく此の女人の強膽に驚いた。そして自分の膽玉の小さな恥ぢた。それから新左衛門は参禪に志し、禪宗の將匠の室に這入つたけれども自分の機に適するやうな人に出遇はない。そこで當時一休和尚は洒落で然かも學人の提撕が深切であると聞き、山城の酬恩庵に訪ねた。時に一休和尚門を開いて忽ち問うて曰く、

『汝、什麼の處より來る』

新左衛門曰く、

『和尚の國より來る』

一休曰く、

『甚麼の事かある』

蜷川新左衛門と一休

古武士の禪機

新左衛門曰く、

「鴉は鴉鳴を作し、鵲は鵲鳴を作す」

一休曰く、

「此外更に有ること無きか」

新左衛門曰く、

「吉野の櫻花、今正に盛んなり」

和尚も是れは少し話せるとでも思つたものか、奥に招じて茶をすよめて曰く、

何をかな参らせたくは思へども

達磨宗には一物も無し

本來空

新左衛門も負けずに、直ちに是れに酬へて、

一物もなきをたまはる心こそ

本來空の宗旨なりけり

こゝに於て初めて氣機相投じ、新左衛門は髪を剃りて知蘊居士と號し一休に師事したのである。新左衛門嘗て一休和尚に邪正一如、空即是色、色即是空を質した、それに一休は數首の歌を以て答へて居る。

邪正一如

生れては死ぬるものなりおしなべて

釋迦も達磨も猫もしやくしも

空即是色

嵯川新左衛門と一休

古武士の禪機

白露のおのが姿をそのまよに

もみちにおけるくれなるのつゆ

色即是空

花を見よ色香もともにちりはてて

心なくとも春は來にけり

と、又、佛法の大意如何と云ふに答へて、

佛法はなべのさかやき石のひけ

繪にかく竹のともずれの音

一休和尚が斯くの如き自在の妙用を得、與奪自由の活機輪を轉するに至つたのは、師匠日華叟和尚の鉗槌にも依るが、一はまた幼時に於け

釋迦達磨
すかも奴と

る母の教訓も與つて力がある。一休の母が臨終に臨んで與へた一文と云ふのは吾人の修養とするに尤もよろしい。試に讀者に提供しよう。我等娑婆の緣盡きて無爲の都に赴き候、御身よき出家に成り玉ひ、佛性の見を磨き其眼より我等地獄に落つるか落ちざるか不斷添ふか添はざるかを見玉ふべし。釋迦達磨をも奴となし給ふほどの人になり玉ひ候はば、俗にても不苦候、佛四十餘年說法し玉ひ、終りに一字不説とのたまひ候は、我と見、我と悟るが肝要に候、何事も莫妄想あなかしこ

九月上旬

不生不死身

千菊丸殿

蟄川新左衛門と一休

かへすくも方便の説のみを守る人は糞蟲と同じ事に候、八萬の諸聖教をそらに讀みても佛性の見を磨かざれば、此の文ほどの事も解し難かるべし。

これとても假染ならぬわかれては

かたみとも見よみづぐきの跡

實に見識の高き、心地の堅實なることは、現代婦人の龜鑑とすべきである。然かも死に臨みても従容自在、一絲亂れざるは平常の修養の程もしのばれて奥床しいと思ふ。この母の督勵があつたればこそ後花園天皇が紫衣を賜つたが受けられず、

大燈門弟滅殘燈、難し解吟懐一夜氷、五十年來簑笠客、愧慚今日

紫衣僧

一世を大達觀し、世人の芽目度しとて祝ふ元旦に鬮腰を提けて、

門松は冥土の旅の一里塚

芽出度くもあり芽出度くもなし

尋常一様の手段を以ては計度することが困難である。其の臨終に際して一偈を打して曰く、

濛々而三十年、淡々而三十年、濛々淡々六十年、末期晞冀捧二枕

天、

洒々落落たる思ふべしである、更に自畫自贊し、又

借用申昨日、返濟申今日

蜷川新左衛門と一休

借り置きし五つのものを四つかへし

本来空にいまぞもとづく

と叫破して、寂然として化を他界に遷したのである。

一〇 柳生但馬守の禪機

守 柳生但馬

柳生但馬守は徳川三代將軍家光公に劍道を指南された方である。嘗て澤庵禪師と其の道場に於いて劍機禪機の妙術を闘はして遂に劍機は禪機に遠く及ばず、劍刃上に喪身失命することは禪機を學ばざるべからずと自覺し、澤庵禪師について熱心に參禪したのである。かくて澤庵禪師は柳生但馬守の爲めに特に『不動智神妙録』と云ふものを書いたが、その一節をあけて見る。

「貴殿の兵法にて申し候はば、向ふより切太刀を一目見てそのまよに心が止まりて、手前の働きが抜け候て、向ふの人に切られ候、これを止まると申し候、打太刀を見るとは見れどもそこに止を止めず、向ふの打太刀の拍子に合せて、打たうとも思はず、思案分別を残さず、振上ぐる太刀を見ると否や心を卒度止めず、其のまゝ付入つて向ふの太刀とりつかば、我をきらんとする刀を我が方へもぎとりてかへつて向ふを切る太刀となるべく候」

是れが禪の與奪自在の境である。また賊馬を借つて賊を追ふもので柔道などをやるにも餘りに自分の力をたのむとその力が餘つて却つて

負ける。名人になると自分の力を使はず、相手の力を利用して相手に負かして仕舞ふのである。次には、

「禪宗には是れを還把二槍頭一倒三刺人一來と申し候、鎗はほこにて候、人の持ちたる刀を我方へもぎ取つて、還つて相手を切ると申す心にて候、貴殿の無刀と被仰候事にて候、向ふから打つとも、吾から打つとも、打人にも打太刀にも、程にも拍子にも、卒度も心を止めば手前の働きは皆抜け候て、人にきられ可申候」

是れははやる心を誡めたものである。兎角有心であると執着する、命がほしい、名がほしい、兩頭に涉つて居ては勝つことが出来ぬ、刀と心と一體にならなければならぬ、心も總に捨て、心身兩つながら忘

するの境に立たねばならぬ。

「向ふから打つとも、吾から打つとも、打人にも打太刀にも、程にも拍子にも、卒度も心を止めば、手前の働きは皆抜け候て、人にきられ可申候、敵に我が身を置けば敵に心をとられ候間、我が身にも心を置くべからず、我身に心を引きしめ置ても、初心の間習ひ入り候時の事なるべし、太刀に心をとられ候、拍子合に心を置けば拍子合に心を取られ候、我が太刀に心を置けば、我太刀に心をとられ候、これ皆心にとまりて手前抜け殻になり申候」

劍道の極意は物に動ぜぬことである。此處に於て禪劍は一致する。劍道其の妙に達しても不動智に至らねば、眞の妙用を現成せしむるこ

とが覺束ない。斯くも禪の極意より劍道の極致を説き示した、その教示を蒙りたる柳生但馬の造詣は如何に深かりしかを想像するに難くない。

一一 伊達安藝の參禪

伊達安藝

先代萩の大立物である伊達安藝は涌谷圓同寺の石水和尚に參禪して居る。伊達兵部少輔、原田甲斐等江戸詰の面々、主君の幼少なるを良き事にし、悪政非道限りなく、主家の行末、民の歎、遂に此の事が公儀の耳に達し、安藝は死を決して出府し、甲斐等と對決せねばならぬことになつた。六十萬石の主家の爲め、自分の赤誠をさしけるは此時

と、出府の前日圓同寺に石水和尚を訪ねた。其の時の問答がある。石

水和尚曰く、

『如何なるか是れ刃上の事』

安藝曰く、

『法戰場中に勝旗を立てむ』

石水曰く、

『意旨は如何ん』

安藝曰く、

『無二亦無三なり』

石水曰く、

伊達安藝の參禪

「如何なるか是れ生死の大事」

安藝曰く、

「一超直ちに如來の地に入らむ」

石水和尙その大丈夫の魂を印可し、更に舞の一さしを命じた。此の大丈夫があつたればこそ遂に甲斐を説破して、伊達家を安泰ならしめ得たのである。

一一 上杉謙信の習禪

上杉謙信

謙信は幼名を虎千代と呼び、長尾爲景の第四子である。幼時より林泉寺の天空和尙に就て教養され、壯時に及んで諸所の禪僧の門を叩い

て膽力を練つた。後に春日山の城主となるや、専ら天空和尙の法嗣益翁宗謙禪師に就いて禪を修行した。宗謙禪師は「達磨不識の話」を授けた。此の公案は、達磨大師と梁の武帝との問答であつて、武帝が「如何なるか是れ聖諦第一義」と云へるに達磨が「廓然無聖」と答へた。そこで武帝が「朕に對するものは誰ぞ」と再問すると、達磨は「不識」と答へた。此の公案を謙信は宗謙和尙から授かつたのである。或る時謙信が例の如く林泉寺に詣つると、宗謙和尙は謙信の見地如何を試験する爲めに、一座の大衆に此の話を舉せしめ、法戰問答盛んなる時に和尙謙信に向つて曰く、

「太守尋常口吧々地たり、這裡に到つて什麼としてか説破せざる」

上杉謙信の習禪

謙信未だ其の時は未徹であつたので總身より冷汗を流した。和尚曰く、

『此事相應を得んと欲せば大死一回し始めて得べし』

謙信退いて工夫參究すること數月にして豁然大悟し、髪を剃り宗謙の謙を貰つて謙信と號し、達磨不識の話より取つて自ら不識庵と稱した。天正六年三月十三日、病を以て陣中に卒した、左の遺偈がある。

一時榮辱一杯酒、四十九年天地空、

今而不問死生境、歲月匆匆短夢中、

一期榮華一盃酒、四十九年一醉間、

生不知死亦不知、歲月只是如夢中、

其の臨終の態度や洒々落落、一點の浮雲すらないのである。其の心鏡

の清絶なることは武將の龜鑑であらう。

一三 武田信玄の氣鋒

武田信玄

謙信の名を聞くものは、必ず是れが好敵手たりし武田信玄を想ひ起すに相違ない。兩雄は實に龍攘虎鬪の概がある。信州河中島の合戦は如何に吾等の心血を湧かしむるか。信玄は慧林寺の快川和尚に就いて參禪した。心地漸く開くるに際し、信玄は禪を中心としたる宗法を作つて是れを守つた。曰く、

一、戰場に於て聊か未練なかるべからざる事、莊子に曰く「生を必ずすれば必ず死し、死を必ずすれば生する」と。

一、毎邊虚言すべからざる事。神記に曰く「正直は一旦の依怙にあらずといへども、終に日月の憐みを蒙むる」と。

一、家中の郎徒に對して慈悲肝要の事。三略に曰く「民を使ふ四支の如し」と。

一、參禪なすべき事。參禪別に秘訣なし、唯生死の切なるを思ふのみ。

一、善惡よく正すべき事。三略に曰く「一善を廢すれば即ち衆善衰へ、一惡を賞すれば則ち衆惡歸す」と。

一、神佛信すべき事。曰く「佛心叶へば時々力を添へ、横心を以て人に勝てば露はれて亡ぶべし」傳に曰く「神は非禮を享けず」と。

一、隠居の時、その子の力を假るべからざる事。碧巖に曰く「榭標横檐人を顧みず、直ちに千峯萬峯に入りて去る」又曰く「是非を犯し來りて我を辨するなし、浮世穿鑿相關せず」と。

彼の造詣、彼の人格の如何なるものなるかを知るに足る。彼の遺偈に曰く、大底還他肌骨好、不塗紅粉自風流。

一四 山鹿素行の天然禪

山鹿素行

日本武士道の開山としては遠くは赤穂義士を發奮せしめて元祿の快舉を起し、又、吉田松陰の如き大丈夫兒を出し、近くは乃木將軍の如き忠臣を出した山鹿素行は、固より天然の禪を會した。彼れの配所殘

筆に曰く、

此時分は別而佛法を貴び候て、諸五山之名智識に逢、參學悟道を樂み、隱元禪師へ迄令相看候。然共我等不器用故に候哉、程朱之學を仕候ては、持敬靜坐之工夫に陥り候て、人品沈黙に罷在候様に覺候。朱子學よりは老莊禪の作法は活達自由に候て、性心之作用天地一枚の妙用、高く明か成様に被存候て、何事も本心自性の用所を以仕候。故滯處無之、乾坤打破仕候ても萬代不變之一理は煌々洒落たる所無疑存候云々。

此の一文に依つて見ても明かであるやうに、素行は自性徹見の境に進んで居つたことは判つて居る。

一五 大石良雄の參禪

大石良雄

大石良雄は網干龍門寺に詣りて盤珪禪師に參じて、屢々痛棒を喫した。元祿六年二月中旬、盤珪禪師に參調して遂に印可を得、手づから名硯を賜つた。その硯に良雄自ら題して曰く、

予嘗參禪盤珪和尚、師曰、本來不生、予不會焉、今春、聊有識其趣、直到和尚而舉焉、師曰是々、于時見師之傍一之硯、師曰、是則西行法師自作之石也、予曰、不然、師曰、即今何人作、予曰、西行未生已前、某所作也、師微笑曰、出於爾者、須返爾焉、以贈予焉、予不辭拜受歸矣、于時元祿六春二月日、大石氏某受用印。

大石良雄の參禪

と、本來不生の端的什麼生か會すと、良雄しばく參究したる結果、遂に父母未生以前の一句に逢着することが出来たものであらう。此一句に徹底して初めて君國の爲めに萬古不朽の壯舉を敢てすることが出来たので、其他四十七士の中にも必要を得たものは澤山居つたやうである。

一六 前田利家の禪

前田利家

前田利家は金澤の藩祖で、文武兼備の名將であつた、軍務の餘暇には名宗の名僧を城中に招じて佛法を聴いた。殊に越前太白山大透和尚に歸依した。一日太白山に至り、禪の捷徑を問うた。時に和尚曰く、

「此事唯念々捨てずして久々に純熟し、時節到來せば自然に證入せん」と、而して和尚は靈雲桃花を見るの話を舉げて工夫せしめた。この公案は、靈雲和尚が桃花の咲けるを見て大悟した勝鬪を示したものである。或る日公は和尚と共に本堂に居つたが、たまく一雜僧あり、庭前に立つて吟じて曰く、

「桃花は細に楊花を追うて落つ」

と。時に和尚公の背を叩いて曰く、

「正に好し此の好個の偈」

此の刹那豁然として大悟したのである。故に公の法名を桃雲院殿淨見大居士と云ふ。